

「自由」を学ぶ 18 課

野島 大輔

SIS 社会科

<アウトライン>

0. 序

1. 学習の背景

2. 実践例

3. 課題と展望

0. 序

日本の教育界において、幾度と無く論じられてきた、「自由」。

その容態は、戦前の全体主義教育に対置する民主主義理念の体現としての「自由」、戦後の国家による教育行政の再統制に対置する地方や教室の権限の意味づけとしての「自由」、行き過ぎた校則中心主義に対置する指導方法としての「自由」、教育制度の歪み全般に対する個人生徒や保護者の裁量権としての「自由」、様々な授業展開をそれぞれの教室が独自に展開する教授内容や教授法の「自由」、...などのように、時と共にその姿や背景を変えてきた。

本学園の 1991 年の創立の機~ちょうど“第二次校内暴力全盛時代”末期頃か~において、千里国際学園中・高等部 (SIS、当時は大阪国際文化中学高等学校 = OIA) は、「自由」教育をひとまずの校是としてその歩みを始めた。その背景には、特に長期の米州などの現地校での学習経験者としての海外帰国生徒らが、服装や頭髪の形態に対する学校の干渉が、生活・学習両面での成長を妨げることが多い、という教訓があった。国内的にも、諸校のあまりに細かな校則主義が、そのもたらす過干渉・過緊張的な雰囲気や何ごとにおいても“原則禁止”的な精神風土を醸成してしまうことに対し、その危惧が大いに指摘されつつある時代であった。

このような背景にあって、創立以来、「新国際学校」という位置づけの上での、国際理解教育の実践にふさわしい授業文化の形成という大きな課題に直面し、私たち教員はそれぞれの経歴を活かしつつも、独自に新しい「自由」を語り、目の前に体現せねばならない必要性におかれた。当時、「学校の目標が5つで、(禁止の)校則が3つしかない学校」という生活指導の方法は、なかなか容易には受け入れられがたいものであったし、「自由」教育を理想に掲げつつ既に相当の困難を生じた諸校の事例も報告され始めていた。新設校が「自由」主義を採るということは、いわば冒険とも感知させられるものであった。しかし、帰国生徒の受け入れ、多文化共生、国際理解、などのトータルな実現をより大きな目標と置く以上、一部の伝統校のような歴史や実績を持たない私たちの学園にとって、様々な角度からの要請に答えたいきながらも、独自の「自由」主義を構築する必要がある、出発時から生じていたのである。

筆者はこの中であって、中学3年生の社会科を担当してきたが、それは、本校なりに「自由」を学習対象及び方法としてどう捉え、生徒にどのように考えさせ、体得させえるか、という責務を担ったとも感ぜられざるをえないことでもあった。啓蒙思想や市民革命を説明し、教科書の憲法の人権の章で「自由権」を語るだけでは、到底それらの要請に答えることが出来なかったからである。以下の実践報告は、その過程で生じた試行錯誤の跡も吸収した、ひとまずのまとめであるが、新しい教材を工夫する度に、生徒からの予期できなかった反応、意外な反応があり、時には対立や緊張があった。それらすべてを通じて、生徒も、筆者も、よちよち歩きをしつつ、何かを学んできた。

15年間の記録として、また、その歩みのまとめとして、本稿を綴っておきたい。また、この拙い記録が、もし他校の教室でも役立つことがあるならば、幸甚に思う。

1. 学習の背景

1.1. 生徒観

年度によって多少の差はあるが、中等部3年生の教室では、概ね帰国生徒(現地校、インターナショナル・スクール、海外日本人学校などの出身者)と国内一般生徒が、だいたい半々の割合で在籍していた。従って既習事項においては、個人差がたいへん大きかった。大体の傾向としていうと、海外現地校で長い間現地なりの“厳しい”(自分のことは自分です、といった意味での)しつけや訓練、及び家庭での自立主義的な日々の教育を受けていた生徒たちは、本学園の「自由と責任」の考え方を比較的容易に理解し、日常生活の態度や以下の学習の中においても、実体験に裏付けられた、教師がみならうべき模範的な反応がよく見られた。海外日本人学校や国内の学校の出身者のうち、過度の校則主義・管理主義的な環境下にあったと告白する者は、大変主体的な興味や関心を持って授業に参加し、吸収力が旺盛であった。両者の協調関係ができてくる段階を通ると、互いに積極的に学びあう雰囲気が育ち、教師が放っておいてもお互いに議論を始める光景も見られた。

帰国生徒にあっても、国内一般生徒にあっても、日常生活や学習においても比較的主体的な責任をあまり問われず、厳しくルールや約束を守らされるという環境にも置かれる機会が少なかった様相の生徒たちが、どのくらいその後の学園生活や日常生活に学習の成果を還元していく姿勢が見られるか、またその完成度はどのようであるか、という面が、この授業の成功度の主要なバロメーターとなった。

1.2. 学習観

「18課」と示したが、この単元の構築には、文字通りに受け取ると、相当の時数を費やす必要がある。

本校の社会科(中学社会科、高校地歴科・公民科)では、6年間一貫教育の建前を生かして、中・高6年のカリキュラムからその重複部分を相殺し、討論や発表の取り組みや、生徒の持つ様々な文化の相互交流のための時間を創設しようと試みてきた。うち、中等部3年間は、「基礎社会」という科目名とし、高等部での学習の準備として位置づけ、学習内容・方法の両面での基礎力を重視した取り組みを進めて来ている。

一方、この「自由」に関する学習単元は、そのようにしてできたスペースを活用した自主設定の単元の一つではあるが、以下に示すとおり様々な関連学習項目を含んでおり、この単元を通じて「中学公民的分野」の幾つかの必修単元を学ぶことができるものである。「中学公民的分野」の学習項目をこのように一旦個別の部品に解体し、より現代の若者の意識や本校の環境に密接な新たなテーマ学習の中に再びはめ込みなおすことにより、結果として学習指導要領の求める項目を概ね網羅させることができる、という全体構想に基づいていた。

この単元設置後に、学園の授業全体を合理的に構成するため「学期完結制」(本校紀要 第6号 2001年)が導入されてからは、制度内にすべての授業を収納するために、中3の「基礎社会3」の時間は全体的な縮小を余儀なくされ、必ずしもすべての課を網羅的に詳しく扱えなくなりましたが、この単元そのものはその後も主要な単元の一つとして設置し続けている。

しかしながら、「千里国際の実践は、中にはおもしろいものがあるが、他校では応用しにくい」という諸般のご指摘に接し、また本校紀要の発刊目的を鑑みると、ある程度の汎用性のある取り組みとして日々の実践を構成せねばならないことは痛感している。

そこで、授業計画や運営の中でもその点を意識しつつ、さらに今回本稿をまとめるにあたって、それぞれの授業が単課としても成立し、環境や背景の異なる学校においてもある程度の使用に耐えうることを、常時念頭に置き続けてみたつもりである。従って本稿では、実践報告の形式を基本としつつも、大単元の新規設置の困難な学校においても、いくつかの個々の授業実践を部分的に採用・応用できることを主眼の一つに置きつつ、以下の紹介を試みることにする。

また、学習方法の習得の面では、この単元のまとめとしてすべての履修生徒に「論文ガイド」を作成・提出させている。「論文ガイド」は、高等部でチャレンジする本格的な論文の作成に備えて、相互の内容的な一貫性を意識しながら個々の項目を挿入していくと、自分の意見を自然に簡単な論文のフォームで完成できる、という試みであり、総合的な論述力の醸成を期待しての取り組みである。実際に、年々筆者をうならせる“想定外”の力作が多数登場している。

1.3. 教材観

既成の教科書や副教材の資料も使いつつではあるが、この単元の主な教材は、筆者が日常生活の中で発見したものや思いついたもの、出合った書物や出来事などから取り上げたものである。賛成・反対・その他様々な立場から論じるも

の、簡単なシンボルに個々の意識を投影して論じやすくするもの、統計資料、新聞記事、それに本稿の生徒必携（ハンドブック）などである。

読み取りの必要な資料には、中学・高校生向けではない一般向けの図書も含まれているが、この単元までの学習で、大人向けの本や資料を読みこなすトレーニングも少々経ており、内容面では必要に応じて筆者のサポートを実施しているので、日本語学習の発展途上の生徒たちも含め、たいいていの生徒たちは臆することなく読みにかかる。

これらの教材を扱うまでの既習事項は、年度・学期により多少の差はあるが、概ね次のとおりである。

<学習内容>	<並行して扱う学習スキル>
0．社会科の考え方とは...？ 1．学習のメカニズム 2．社会科学の根本命題 性善説と性悪説 テクノロジーの発達とその功罪 戦争の防止と平和の構築 競争社会と平等社会 非暴力 3．日本社会の問題点 御前会議と集団無責任制 4．グループワークとリーダーシップ 5．「自由」 *本稿で紹介する実践* 危険・安全・責任の関係	パズル問題、グループ・ディスカッションの基礎 一般書の読み取り、統計資料の読み取り、集中力 一般書の読み取り、用語調べの方法 ブック・ノート、簡易ディベート ディベートの進め方と作戦・評価基準 チーム・ディベートの実施と振り返り 原典資料の読み取り、問題の構造的把握 グループによる意思決定 ディスカッション、インタビュー、論文作成など

また、「自由」の自主設定単元の学習を終えた後は、学期の学習の総まとめとして、「部落差別」の問題をゲーム形式の題材を使って学んでいる（本校研究紀要 第4号 1996-7年 にて紹介）

以上の単元構成は、将来の日本・国際社会の形成者として不可欠の素養ではあるが、特に日本社会で育った者に従来備わりにくいとされていたものを習得させることを主意に組み立ててきた。また、それらを学ぶ上で必須の様々な授業形態に応じた学習スキルの養成という観点を、もう一本の平行軸とした。

2．実践例

以下の授業事例は 15 年間の実践の縮約であり、その連続性や継続による効果を重視してはるが、できるだけ様々な授業での実践に援用できるように、それぞれが一応独立した「課」の形にして紹介することとする。また、本校の場合の授業展開とその様相については、それぞれコラムにして記し、報告することにする。連続して用いても、一部を取り出しても何とか使えるように、との意図からである。また、社会科だけでなく、総合学習や人権学習、LHR や道徳の時間においてもできるだけ様々な活用できるよう、簡単な形式でまとめることにも主眼を置いた。

第1課 「自由」な学校 その1...T高校の試練

ビデオ内容...T高校は、管理主義的な学校で力を発揮できなかった生徒たちのために創設された。
 “命令や強制をしない”というのがこの学校の教育の根本方針である。
 大自然の中の木造校舎、全寮制、特別に選ばれた教師陣...
 新しい学校として、全国の人々の期待が集まった。
 しかし、開校後、いじめや喫煙、授業サボリなどさまざまな問題が現れ、

ついに生徒を自宅に返して1週間の臨時休校の措置が採られた。

その後生徒会メンバーらが遠足を企画するなどの努力を続けて、学校の雰囲気は大変良くなったが、1年後、出席日数の不足する生徒たちが多数現れ、進級の可否の問題が生じる。職員会議は再び紛糾する…。

この学校の試練のルポ(ビデオ)を見て、例えば次のような項目で意見交換をする。

この学校の生徒になってみたい? / なってみたいくない? その理由は?

次のうち、現状をどう見ますか。

(1) 教育の理想は正しいが、実行できていない。

(2) 目標にそもそも無理がある。

この学校の教育方針への賛否とその理由を出し合おう。

あなたが教師なら、問題を起こしてしまっている生徒たちをどう指導しますか。

関連して扱える単元

教育の義務と権利(日本国憲法を交えて)、など

筆者の教室では...?

ビデオの前半、森の中のキャンパスで、着ぐるみを着ている生徒や悠然とスケート・ボードに乗っている生徒を見ると、「一度は行ってみたい」という生徒が多く、中には「体験入学をしてみたい」とまでいう生徒もある。しかし後半、現実の問題点が次々と映し出されると、その意欲が萎えていく傾向がある。「うちの学校に似ているね」「うちとはタイプが違う」などの反応も出てくることがある。この単元の導入部に効果的な題材として、毎回冒頭の授業で使用している。フリースクールや海外の学校で、これに近い環境の学校に居た経験のある生徒たちとも出会った。経験者たちの感想は、まちまちである。

第2課 「自由」な学校 その2...J学園の卒業式と地元の反応

ビデオ内容...J学園は、管理主義的な教育のアンチテーゼとして、大きな期待を持って創設された。

授業への出席、服装など、すべて個々の判断に任されている。

デザインや美術などで優れた才能を発揮する人材が輩出されている。

卒業式では、生徒めいめいが個性的な服装や発言をし、発言したいものが次々とマイクを取る。やがて校長先生のピアノ伴奏に合わせて大合唱が始まると、感動のあまり泣き顔の生徒もある。インタビューでは生徒たちから学園生活に対して「心のある人が多い」など感動の声が挙がる。

読み物内容...一方、この学園については批判本が出されていた。

アンケートによると、地元住民の76%が教育方針に反対、撤退を求めている。

服装、態度、言動、などが地域の風土にそぐわず、風紀を乱している、などが理由である。

本の著者は、生徒への責任を放棄した野放し教育であると批判し、

「学園はアメリカの真似事」と位置づけ、その教育方針が日本にそぐわない、とする。

これらのビデオや読み物を見て、討論方式で例えば次のような事柄を話し合っていく。

まず、卒業式について、感想は?

(原典図書の立場に留意させた上で)読み物を読み、感想を出し合おう。

と を比べ、この学園が何を目指しているのか、考えてみよう。

この学園の教育方針について、賛否とその理由を出し合おう。

T学園、J学園、本学園を比べてみよう。

関連して扱える単元

「自由権」(憲法、人権の章)、民主政治の発展と啓蒙思想(ロック、ルソー、モンテスキュー) など

筆者の教室では...?

卒業式ビデオを見ると、多くの生徒が興味深く、時にはうらやましさを湛えて共感的な反応を出す。「うちの学校と雰囲気がよく似ている」の声もよく聞かれる。読み物の内容とのギャップにはさすがに驚くが、やがて、少々のことには眼をつぶって、とても大きな「自由」を理想として目指している学校なのだ、と気づいていく。

賛成の立場の意見としては、「細かい規則ばかり押し付けていると、発想が小さな人に育ってしまう」「昔の学校のことを祖父母から聞くと、今の学校ほど細かくなかった」など。反対の立場の声としては「自由といっても法律や常識の範囲内であればならない」「皆が皆、芸術家に育つ訳ではないだろう」などが挙げられる。授業者もかつて実際に教員採用試験を受けてみようか、と思ったことのある学校なので、生徒の立場から様々な意見をきくと、気づかされる事が多い。

第3課 「自由」な学校 その3...K大学の卒業式

ビデオ内容...K大学は、自由と独立の気風を最も尊重している大学である。

名物の卒業式では、自由な表現の服装で証書を受け取る伝統がある。

世相を茶化した者、半身裸の者、様々な学生が演壇に上がる。

学長や教授は度量を持って受け止めている。

インタビュー情報(K大名誉教授や卒業生らから聞いた話)...この卒業式には、普段の教育精神が表されている。

卒論を書くかどうか、についても、個々の学生の意思に任されている。

その代わり、書かないということについて責任を持たなければならない。

卒業式の服装についても、反響が悪ければ自分の責任。ただのふざけではない。

何もかも、自分で開拓しないと放っておかれる。

官僚養成のT大学や、組織を重んじるO大学に比べ、一匹狼的な性向を持った人が多い。

ユニークな教授は、授業に出なくてもおもしろい弁解が出来れば単位を与える人もある。

これまでに、ノーベル賞の受賞者を多く輩出している。

学生の自殺率が高く、何事にも自分で責任を持つ、というのは人によると重過ぎる場合もある。

学生のタイプによって、向き・不向きがある。

対話形式で、様々な発言を求めていく。

K大学の名物卒業式のビデオを見て、感想を出し合う。

K大学に行きたいか、またK大学の学生に自分は向いているか、互いに意見を出し合う。

関連して扱える単元

「自由」思想の系譜(啓蒙思想家)、自由権(学問の自由、思想・信条の自由、表現の自由)に関する判例学習、学歴社会、など

筆者の教室では...?

卒業式のビデオを見せると、多くは笑い出す。最初は過激な服装に対してであるが、叱りもせず礼服で大真面目に証書を渡している学長とのギャップにまた眼が集まる。偶々、本学園の初代学園長がK大学の出身者であり指導者であるので、様々なエピソードを直接聞いて引用すると、卒業式で単にふざけているのではなく、本当の「自由」を探し求めての気風から生まれた伝統である、と少しずつ理解が深まっていく。賛成・反対よりも、まずは当惑の反応が多いという印象であるが、「自由」の意識幅を広げるために、重要な題材として用いている。

第4課 日本の教育についての情報調べ

日本の教育について、下の事柄について調べてみよう。

子どもの人口とその全人口中の割合の年次変化
青少年の犯罪率、青少年の被害事件
校内暴力、不登校、引きこもりの件数とその年次変化
各国の教育予算と国際比較
高卒と大卒の賃金差比較とその国際比較
日本の大学の優秀度国際ランキング
世界の人々のうち大学教育を受けることができる人々の割合
戦後の日本の教育の歴史と変化
占領軍による教育改革、逆コース、受験戦争、大学紛争、校内暴力、ゆとり教育、高度成長、バブル崩壊、学級崩壊、総合的な学習、学力低下論争...など
子どもの権利条約や、国連の「子どもの権利委員会」での、日本の教育に関する審議や勧告

関連して扱える単元

教育の国際比較、統計読み取りのスキル、など

筆者の教室では...?

社会科の学習は、まず身近な社会から、という通説があるが、それにしては、北欧社会などでの実践に比べると、青少年の権利や義務、実践的な知識の共有、などの学習が日本では手薄ではないかと思う。かつての絵本に『ぼくのいまいるところ』(かこさとし作 童心社 1982年)という名作があったが、まず14~15歳の置かれている社会やその根拠となる法律、統計データ、など、各自の世代や個人の相対的な現在位置を感得することは、個々の成長にとってかなり重要な情報の取得だと思う。

学校教育に関する法律、知識、データ、歴史、などを扱っていくと、知らないことを知ったときの喜びや驚きが聞こえてくる。特に犯罪や暴力など、近年の若者の負の側面に関するデータには、その程度の深刻さにびっくりした、という反応が多い。

第5課 「学校崩壊」

現役中学教師による、ベストセラー『学校崩壊』からその一部を読んでみよう。

「学校崩壊」 河上亮一

授業中に私語が絶えなくなったのはいつのころからか。いまでは大学でもそうだというから、中学校などまだましなのかもしれない。

学校の授業は、基礎的な知識をまとめて教えるのが基本であるから、もともとたいして面白いものではない。関心のない生徒にとってはとくにつまらないだろう。そこを教師は、なんとか興味を持たせるためいろいろ工夫するのだが、それだけでは不十分である。そこで、たとえばテストをしたりして強制力をはたらかせ、しかたないからやるんだというところへ追い込んでいるのである。そうしたことをふまえて、親も社会も子どもにきちっとアナウンスしていないのが決定的な問題なのだと思う。

家で自分の好きなようにしているだけでは、大人になるための力がつかない。きみたちは未熟だから、我慢して一人前になるための力をつける努力をしなければならぬ。それが学校なのだ。というサインが出なくなると、学校というところは好きにできるような場ではないから、いやになってしまうのもいたしかたないことだ。

誰にも気を許せない

いまの生徒たちが固くて狭い自我しかもっておらず、他人のはたらきかけを柔軟に受け入れることができないのは、小さいときから、傷つけられたことがほとんどないからではないか。小さいときから、それはだめだとか、おまえの思っていることは世間で

は通用しないよ、というように、親や兄弟や周囲の人が少しずつたいていけば、中学生になってこんなふうにはならないはずである。大事に大事に育てられすぎたのである。

なにしろ、生徒にしてみれば、教師は基本的に自分たちを傷つける存在なのだ。学校でやっていることは生徒の意に沿わないことが多いわけで、教師のはたらきかけの一つひとつが彼らを傷つけると考えなくてはならない。

学校というところは、生徒が自分から望んで来ているところではない。いやでもやらなければならないことがたくさんあるわけだから、「うるせえな、教師は」ということになるのは自然のなりゆきなのだ。以前の生徒は自分を抑えて我慢していたのだが、最近はそのができなくなったため、生徒が教師に食ってかかったり、暴言を吐いたり、あるいは暴力をふるったりということが日常的に起こるようになったのである。

最近の生徒たちは、自分を抑えて引くことをしなくなっただけでなく、自分はいくまで正しく、どこまでも自分を主張していいと思うようになっている。自分が「正義」だと思っているようである。

たとえば、授業がつまらなければしゃべっていいんだと思っている。もちろん、以前の生徒もしゃべりはしたが、それは悪いことだと思っていた。このちがいは決定的だ。

ジャーナリズムや評論家をふくめ世の人は、そのところをまったくわからずに、わかる授業をしないからだとか、授業が面白くないからだとか教師を攻撃している。しかし、授業そのものを成り立たせる基盤が崩れてきているのが根本的な原因なのである。

こまかな校則ができたのには訳がある

さて、体罰のあとは、校則が集中的にやり玉にあげられた。三十年ほど前に私が教師になったときにも、校則はあったと思うのだが、校則などという言葉を意識することはまったくなかった。教師が何か言えば、生徒はそれを聞く、という関係が成り立っていたから、いちいち校則などを持ち出す必要はなかったのである。

しかし、だんだん生徒が教師の言うことを聞かなくなってきた、どうしてだめなのかといちいち反論するようになった。そこで教師は、苦しまぎれに校則に書いてあるからと言わざるをえなくなったのだ。そして、生徒の行動の変化に追いつくために、こまかな校則をつぎつぎに追加せざるをえなくなったのである。

たしかに、現実をまったく見ないで校則の文章だけ読むと、とんでもないことがいっぱい書いてあると思うかもしれない。どうも学校の外の人、生徒の状況が変化したり、生徒が教師の言うことを聞かなくなってきたという現実をいっさい考えずに、文面だけでひどい校則だと言いはじめたようである。

校則を批判する人たちは、子どもの自由や人権だけを考え、学校が教育の場であることをまったく考えていないようであった。学校の教育力が低下し、生徒が教師の言うことを聞かなくなると、教師が必死に何とかしようとしているとき、その教師をたたいたのである。これは学校の教育力をますます低下させ、学校そのものを崩していくことになった。

きみは未熟で、まだ一人前の社会人ではないのだから、学校で学ばなければならないんだ、学校というところは修業の場なんだから、人権というものがすべて保障されるわけではないんだよ、街中とはちがうんだよといったことはとても言えなくなってきた。昔は「きみは子どもだから」というのが通ったのだが、いまはそれが通用しなくなったのである。生徒が、自由とか人権とかを盾にして向かってきた場合、教師は大きく後退せざるをえなくなったのだ。

自由を掲げて自由が失われていくジレンマ

この十数年、学校で管理が強まったという言い方がされ、管理はだめだと言われてきた。そして、これが学校たたきの中心的な論拠となった。これに対して、私たちは、基本的に学校というところは管理がなければ成り立たないと言ってきた。一つのシステムが成り立つためには、そのシステムの中に入ることを了解してもらわなくてははじまらない。

私たちはこのようなことを言って、なんでも子どもたちの好きなようにさせるという意見に対抗してきたのだが、皮肉なことに最近、社会そのもの子どもに対する保護(=管理)が強まってきている。

自由という掛け声が強くなっているにもかかわらず、一方で、子どもを保護しなくてはいけない、あるいは面倒をみなくてはいけないという考え方が強まっているのである。子どもを放っておくと何をやるかわからないということがわかってきたのだろう。そのために、自由自由と叫ばれているにもかかわらず、どんどん自由が失われている。これは明らかにジレンマである。

だから私は最近、管理が必要だということをあまり強調しないようにしている。自分で考え自分で行動し、結果に責任を持つ、つまり自由が大事だと発言しなくてはいけないのではないかという気がしている。

しかし、すべてに責任をもって行動しなければならぬというのも言いすぎである。

それにはまず一人ひとりの人間が、みんな独立した主体的な個人になれるという前提がなければならない。しかし、生徒の様子

を見たり自分のことを考えてみれば、すべての人間が主体的に自分の判断と責任で行動できるようになれると思うのは、絵空事ではないかと思う。

私の現場感覚から言えば、あらゆる場面で主体的に自分の判断で行動できる人間は、ごく少数しかいないと思う。あとの大多数は人に委ねるという部分を強くもつ人たちである。あの人がかようなふうにするからぼくもそうしようというようにして生きていくのが、ある意味で言えばふつうのことなのだ。そのような人たちに、すべておまえが判断しなくてはいけないと言うのはどうだろうか。一人ひとりがそんなに偉い人間になれないのではないか。だから、主体的に行動するということと、みんなでいっしょに行動するということが調和しておこなわれることが現実的な方向ではないか。私たちは、自由と管理についてもっと深く考え、現実的な発想が必要なのではないかと思う。

すべて個人の責任に帰するような方向で教育改革をやったり、学校を解体していくというのは、やはり失うものが大きすぎると思う。これは日本の場合、とくにそうである。教育には、強制と自由のバランスが必要なのだ。

「学級崩壊」しているクラスに居たことがある生徒に、様子を聞いてみよう。

なぜ勝手な振る舞いをする人がなぜ居るのか、推測して意見を出し合おう。

あなたが教師なら、学級崩壊にどう対応するか、立案してみよう。

「あらゆる場面で主体的に自分の判断で行動できる人間は、ごく少数しかいない」とあるが、それについて賛否とその理由を出し合おう。

関連して扱える単元

日本の教育史、自由と管理の関係、など

筆者の教室では...?

この主題を置くかどうかに関わらず、数年前から様々な必要性を感じて、各学期の授業の最初の段階で、全員と短い個人面談を実施するようにしている。そこで解ることだが、60名前後の各学年で、近年では平均して数名が学級崩壊のクラスに所属した経験を持っており、だいたい十数名くらいが所属していた学校の他のクラスで学級崩壊があったという経験を持っている。また、ベテラン教員である私の叔母も学級崩壊を経験しており、その経験をシェアしながら授業を進めることもある。

「自由」教育を校是として掲げる本校にあり、特にその方向の教育への志向の強い家庭を背景にした個性的な生徒が多く通っている、という本校の気風にあっては、氏の文章に対して拒絶の反応が出ることを当然思いながらこの課に取り組むが、意外にも結論の“教育には、強制と自由のバランスが必要”の部分には、納得・共感する生徒が多い。(しかし、この先生に担任をしてほしい、と希望する生徒はほとんど居ないことが多く、互いに眼を見合わせて苦笑するような教室風景となるのだが...)一方、個人に責任を負わせるやり方は無理、という段に対しては、「そうとは限らない」という反論がよく出される。アメリカからの帰国生徒の「確かに、“Hey, It's a free country!” と言いつつ悪いことをする人たちも居たけど、それは悪いことだと解ってやっていたよ。」という発言が思い出される。

この図書が出されて数年経つが、周知の通り、一部の子ども理解しがたい行動やそれへの対策、さらにはその混乱ぶりについては、本書の予測した範囲を越えているのではないかとも思われる。駆け出しの頃に勤務した学校では、そもそもルールの文章が学力の問題で読めなかったり、ルールという概念が理解できなかったり、そんなものがあって理解できたところで何の抑止にもならない苦境に置かれていたりして、「校則」主義のレベルでは到底対応できない状況にある生徒たちが多数、という環境にあった経験から、先輩教員たちは学級崩壊のニュースを聞いても「え、“学級”でいいの、うらやましいなあ」とジョークを飛ばしあっていたことを思い起こす。喫煙やいじめ、器物破損や暴力などが日常茶飯事であったが、今思い起こすとこの時の経験が筆者にとって「自由」を考える際の貴重な財産となっているように思う。

本書にもその趣旨が現れている“子どもは大人社会の鏡である”との金言を思い出しつつ、筆者も自戒を込めて振り返られる課である。

第6課 芸術と「自由」～世界に通用する芸術を生む環境とは～

日本出身で世界的な芸術家の、岡本太郎氏の作品の写真を見て、そのタイトルをあててみよう。



スライド写真内容... (岡本太郎氏の作品の写真をいくつか見せる。ただし、題名はふせておく。)
「縄文人」「動物」「鐘 (お寺の特注作品)」「座ることを拒否する椅子」など。

引用エピソード内容...生前の講演会の発言から (授業者が参加して記録)

緑色の背広と虹色のネクタイ、という服装で現れた。

会の最初に、「講演はつまらないからなし、諸君の質問にのみ答える」と宣言した。

「人間は、原始時代の生活に比べると、文明のお世話になることで退化している。」

「電車賃を払って電車に乗るなど、大きな妥協。今日は自宅から歩いてきた。」

「スキーをしたことがほとんどなかったが、いきなり上級者向けのグレンデの頂上から滑り降りてみた。その時、何かが自分の中で爆発した。これが素材になった。」

「真の芸術には、一切の妥協を省かねばならない。」

氏は、芸術家が少ないといわれる日本出身の、世界的に評価の高い芸術家のひとりだった。

作風についての感想を出し合おう。

「芸術のためなら一切の妥協はしない」という考え方への、賛否とその理由を出し合おう。

氏のエピソードを聞いて、大芸術家を育てる環境とはどんな環境だろうか、考えて意見を出し合おう。

関連して扱える単元

市民革命 (「自由」を求めての戦い)、表現の自由、など

筆者の教室では...?

現代っ子は、行儀が悪い、品行が幼い、...などと批評されるが、一方で、小さくまとまりすぎ、甘えていて活気がない、との指摘もよく評論家たちからなされるところである。岡本氏の考え方をそのまま肯定するわけではないが、新しい世代の子供たちにこのような大きな風呂敷も、ぜひ知っておいて考慮に入れてもらいたい。実際に、本校を卒業して芸術関係に進む者も少なくないので、理想として共感を持つ者もある。本校の教員で、実社会の戯れ言を度外視して研究を命そのものとして歩んできた方もあり、その存在がよい刺激となっているという背景もある。

岡本氏の講演会の思い出は、氏が個人となられた今非常に貴重であり、芸術活動を支える信念について聞くとけっこう意気を感じる生徒もある。また、氏の代表作「太陽の塔」は本校近傍にあり、最近子ども対象に内部見学会が開かれていることもあって、身近に感じる生徒も多いので、導入部は比較的スムーズである。

また、このくらいの進み具合で、生徒の間で「自由」についての国際比較の論点が出てくるので、上手に取り上げて、以下の課に繋げていきたいところである。

第7課 「自由」の代償～プロの冒険家の眼から見た日本社会とは～

有名な冒険家である椎名誠さんの、世界的な力ヌーイストの野田知佑さんとの対談を描いたエッセイを読んでみよう。

「自由」の代償 椎名誠

私は野田さん（カヌーイスト。世界の大きな河川をゆっくり下る探検記で有名。普段は千葉県の大湫湖のほとりに愛犬と暮らしている）に、その日ガク（その犬。世界初のカヌー犬となるよう、野田さんにずっと育てられてきた。）が何度も大なる混迷の大脱走（この文章の著者である椎名誠氏の漕ぐカヌーに乗るのを嫌がり、カヌーを離れて川沿いを走ってついてきたり、また疲れてしぶしぶ椎名さんのカヌーに乗ったりしていた）を繰り返してきたことを話した。

「ふーん。」と野田さんは黙って聞いていた。

「それでいいですよ。」と、きっぱりした口調で言った。

「もっと遠い距離を離れてしまってもあいつはちゃんと自分の力で下ってきます。やつをもっと信用してもいいですよ。」と言った。

「あいつがね、大湫湖で鯉のスイコミを呑んだときも、最終的には体力勝ちです。それとあいつ自身が持っている運の強さですね。」

「体力勝ち？」

「うん。あいつは仔犬の頃からずっと放し飼いだっただけだよ。だから大湫湖のまわりを一日 20 キロも 30 キロも走り回っていた訳です。それでぐんぐん筋力がついた。普通の家で鎖につながれて飼われている犬とは基本的に体の力のつき方が違うわけですよ。」

「ああなるほどね。」

「だからあんなものすごい大手術に耐えられたと思うんですね。」

「ああなるほどね。」

私は同じ返事しかできなかった。しかし野田さんのその話は大いに納得できることだった。

「獣医に連れて行った時ね、誤って鯉のスイコミを呑んでしまって...と言ったら獣医は『そういうことがないようにやっぱりいつも鎖につないで飼った方がいいんじゃないですか。』なんて言ってたけど、僕はそうではないと思った。犬にとって多少危険はあるとしても、犬はやっぱり自由に走り回れる生活をしていた方が嬉しいだろうと思うんです。犬はもともといつでも走り回っている動物なんですからね。そしてどの犬でも自由に走り回っていた時代というのは人間達はそんな危険なスイコミ鉤とか畑の農薬とかを使っていなかった訳ですよ。」

「ああなるほどね。」

と、私はまた同じことを言った。本当に全くその通りなのだ、と私は体の内側で大いにコーフンしながらうなずいていたのだ。

ここ数年、私は何かモノノケにつかれたような勢いで世界の色々な国を旅していた。3年間余りで20 数カ国を歩いていた。そしてそのほとんどが都市からは離れた、いわゆる辺境の地というようなところばかりだった。それらの国を歩きながら、なにが圧倒的に共通しているものがあることに気がつきはじめていた。それは犬と子供がどの国でも実に自由に伸び伸びと遊んでいる、ということだった。そして勿論、犬はどの国へ行っても鎖などなく、犬は犬としてそれぞれ自立し、人間達と同じように自由に動き回っていた日本のように鎖を付けられている犬は病気の犬だった。

30代の頃、世界中を歩き回ったことのある野田さんにそのことを話すと、

「そうだ。たしかにそうだった。」

と大きくなずいた。

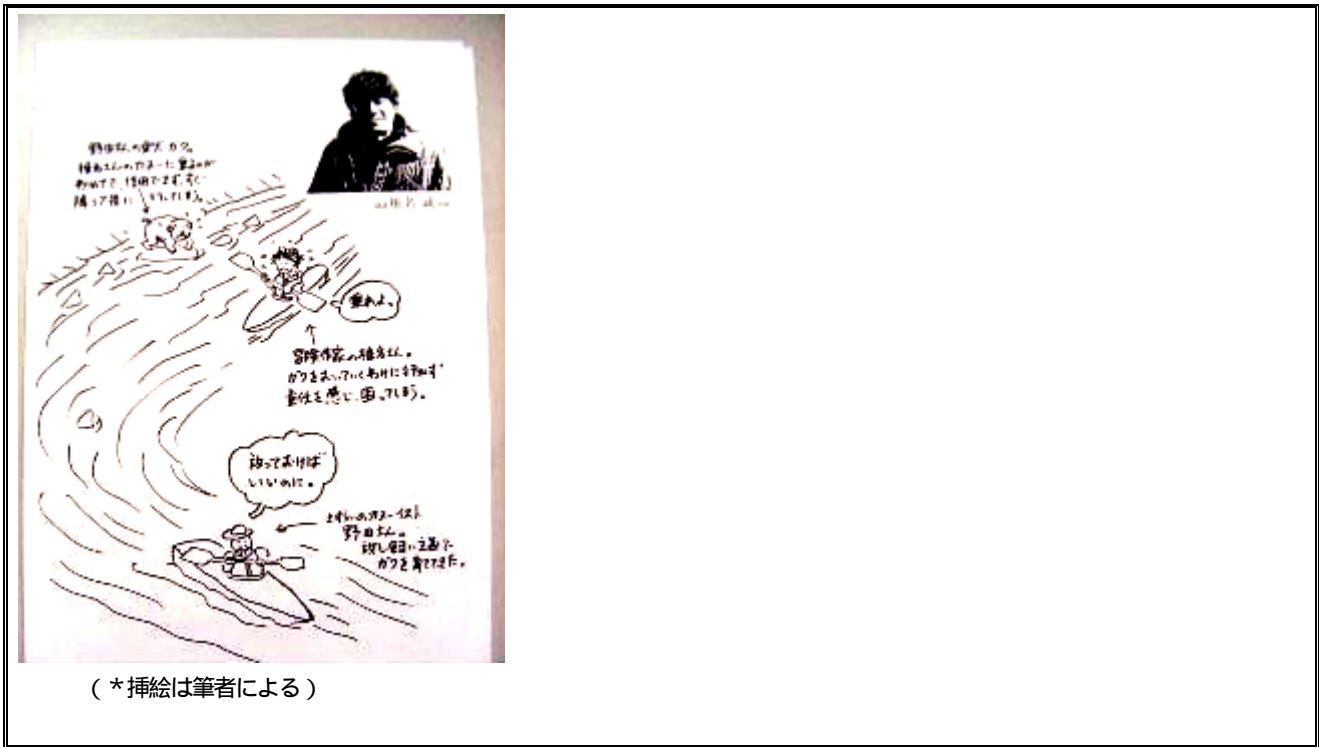
「だけど今はね、大湫湖辺りでもうさくさくなっているんです。あんなすさまじい田舎なのにね、近所の何人かの人が、犬をつなげ、と言ってきたんですよ。」

「ふーん。あいつは何の危険もないのにねえ。」

「そうね。むしろ野放しになっていたのだからあいつの方が危険にあっちゃった訳だし...。」そう言って野田さんは眼のふちで少し笑った。

「でもね、たとえガクの奴が鯉のスイコミを飲んであのと死んでしまったとしてもね、囲いの中に鎖でつながれたまま長生きして死ぬよりも、やつ自身は満足じゃないかなって思うんですよ。今の世の中は犬にも人間にも『自由の代償』っていうのはやたらに重くなっている訳なんですよ、きっと。」

* () 内は筆者による補足



エピソード内容...筆者の参加した講演会にて

椎名誠氏は、「自由人」として知られる。世界の辺境の地にほとんど準備なく出かけては、そこでの体験をおもしろおかしく著作にして人気を博している。講演会(筆者が参加して記録)では、海岸にゴミに混じって流れ着く「浮き玉」を使って野球をする「ウ・リーグ」を作り、地域で出会った人たちと真剣に遊んでいる様子が話されていた。

友人の愛犬を引き受けて、愛犬が逃げたらどうするか、意見を出し合おう。

その場合に、飼い主が「ほうっておいてください」といった場合に、本当にそうするかどうか、またその理由を出し合おう。

海外生活の経験のある人に、世界では、圧倒的に「犬と子供は自由」なところが多い、とあるが本当かどうか聞いてみよう。

日本は狭く息苦しい、という感想について、海外生活を経験している友達に、体験や感想を聞いてみよう。

犬を実際に飼っている人に、できれば放し飼いにしたいか、心配だから繋いでおきたいか、意見を聞いてみよう。

が犬ではなく、人間の自分の子供だったら、基本的に自由に育てるか、厳しくしつけるか、意見とその理由を出し合おう。

関連して扱える単元

官僚制度の功罪、規制緩和、保護者の義務、動物の権利、など

筆者の教室では...?

犬という身近な生き物にとえて、人の安全を考え確保する責任ある側の立場に立って考えてみようという思いつきでこの文章を使っている。犬と子どもの「自由」「自立」についての国際比較になると、体験からなかなか貴重な情報交換が展開されていく。「自由」など抽象概念の文化間比較、という視点やスキルを養成することも肝要である。

概ね、犬については、海外の都市部や人口密集部を除いては、放し飼いか庭の中で放し飼い、というケースが多く、家族の一員としての存在感も大きいようである。現地の住居や庭の広さにも関係があるが、まったくの室内犬を除いては、繋ぐのは特殊な場合、という認識があるようだ。

子供の生活については、同じ海外でも行き先によって様子が変わっている。伝統的な日本人の現地社会や日本人学校があったり、多数の進学塾が進出したりしているようなアジア都市部では、むしろ帰国前の方が「自由」感が薄かった、という生徒が多く、アメリカやオース

トラリアからの帰国生の感想では海外生活の方がのびのびしていたという声が多い。「帰国後親はコロシと変わる」というオーストラリアからの帰国生徒もあった。塾や土曜日の補習校に通っていると、現地の子供たちは仲良く遊んでいるのに、なぜ自分だけが通わなければならないのか、という切ない思いも、例年多く聞かされる。

椎名氏の著作では、この他にも「怪しい探検隊」シリーズなど筆者がいくつか愛読しているが、講演会での話しぶりや語法、立ち居振る舞いにしても氏はまさに「自由人」そのものであり、氏と交流の深い「自由人」たちにとって、いかに高度管理社会が窮屈なものであるか、深く感じさせられる。

第8課 『子犬の育て方』

犬のしつけの専門家の話を読んで、「しつけ」について考えてみよう。

「子犬の育てかた」 金森美知子

犬のしつけで、いちばん大切なのは、特別な訓練ではなく、日ごろの家庭の接しかたです。そのことを中心に、犬の飼いかたについてお話ししたいと思います。

室内で飼うと苦勞も楽しみも大きい

犬を、室内で飼うか、外におくか、ということは、多くの人にとって、選択の余地のない問題でしょう。マンションなどで飼うばあいは、当然室内ですし、アレルギーなどのために、室内では動物を飼えないかたも多いことでしょう。

けれど、もしどちらかを選べるのなら、「しつけ」の点からいうと、犬は家の中に入れてやりたいと思います。

犬が、群れる動物だということは、よく知られています。いまでも、郊外では、捨てられた犬や迷子の犬たちが、食べものを求めて集団で走りまわっているのが見られるところもあるでしょう。ひとりでは、弱く心細いので、群れをつくって互いに守りあい、協力して生活しているのです。

家庭で飼われている犬も、人間の家族を「おなじ群れの仲間」とおもえばこそ、群れのリーダーや上位の人の命令にしたがい協力しようという気になるのです。そしてこの「おなじ群れに属している」という意識を育てるには、家の中に入れて、人間の家族が食べたり寝たりしているのを、見せてやるのがいいのです。

庭の隅などにつながられ、家族が家の中で何をしているのか、ぜんぜん見えない状態で買われている犬は、まるで「ひとり暮らし」をしている感じでしょう。

そんな孤独な犬にとって、ときどき家から出てきてエサをくれたり、散歩に連れていってくれる人は、「親切な隣人」です。その人がそばに来てくれれば大喜びするしエサのためなら「おすわり」も「お手」もしますが、それ以上に、命令に服従しようという気にはなりにくいのです。

まえもって家の中のルールをきめる

子犬が家に来ることになったら、しておかなくてはならないことは、家の中で犬に守らせるべきルールを、家庭で話し合っておくことです。

犬の立ち入り禁止区域は、どこか。犬はソファーや食卓のイスにのっていいか。テーブルに前足をかけてもいいか。柵や、台所の流しに、前足をかけて立ち上がるのはどうか。家族に跳びつくのはどうか。犬がかじっていい物は、どれか。

いったん決めたルールを、あとになって変えると、そのことを犬に納得させるのには、時間も労力もいるし、ヘタをすると犬からの信頼を失います。たとえば、子犬のあいだは、さんざんソファーに寝かせておいて、大きくなったら、「やはり、ソファーが毛だらけになるのは困るから、犬をのせないことにしよう」と決めたりしても、犬は自分の気に入った場所からひきずり下ろされるのには抵抗しますし、そうなるとうなったり、手を振り上げたりして追い払うようになってしまいます。

また、たとえば大型犬だと、小さいとおもっていた子犬がみるみる大きくなって、ある日、ヒョイツと後足で立ち上がってテーブルの上の二オイをかいだりします。そんなとき、「犬がそんなことをするなんてとんでもない！」という調子で、即座に前足を払いのければ

犬はそのルールをするに理解するものです。ところが、「ニオイをかくだけなら、まあ、いいか。なににも食べものはのてないんだし……」と、叱るのをためらったりしていると、その心の迷いを犬は見抜きます。それで、そのときは払いのけられても、このつぎは大丈夫かもしれない、とおもって、なんどでもテーブルに足をかけるようになります。

犬がおとなになったときに、その犬とどんなふうに暮らしたいかを想像して、子犬が家に来たその日から、人間がそのルールを守って育ててゆくべきです。

噛ませない、跳びつかせないしつけ

新しい家に連れてこられた子犬は、はじめのうちは緊張しておとなしくしていますが、慣れてくると、人間にじゃれつくようになります。人がなでようと手を伸ばすと、その手を噛み、そばを通りかかる人の足に跳びかかってかじりつき、振り払おうとすればするほど、興奮して、うなり声まであげてかかってきます。

はじめて犬を飼った人は、これを見て、「この犬は、噛む！」と驚くようですが、犬には手がないのですから、人と遊ぼうとするときに口を使うのは、ごく自然なことです。けれども、これを放っておくと、口を使うことが習慣になって、将来、怒ったときには本気でガブリと噛むようになりますから、早いうちにやめさせたほうがいいでしょう。

これをやめさせるには、手を噛んできたときに、だまって一瞬、指を犬のノドの奥まで突っ込み、犬が気持ちわるくてゲツというくらい、舌の付け根を押さえてから、何食わぬ顔で遊び相手をつづけるのがいいと思います。どなったり、たたいたりせず、噛まれるたびに毎回、ほんの一瞬、指を突っ込むのがコツです。そうすると犬は「人を噛むとノドが気持ちわるくなる」とおもって、だんだん噛まなくなります。子犬が「飼い主と遊ぶのは楽しい」とおもうのはいいことなので、叱りつけてその気持ちをしばませないようにします。

犬が人に跳びつくのも、じゃれて噛むのとおなじで、親愛の情を表しているのですから、叱らないほうがいいのです。けれども放っておけば洋服を汚されたり、ストッキングを破かれたりしますし、大きな犬だと危険ですから、子犬のうちに、跳びつかないようにしつけておくべきでしょう。

それには、まず、跳びついてきたときにけっして歓迎しないことです。前足を手で受け止めて、やさしくなでてやったりしてはいけません。跳びつかれたら迷惑そうに払いのけ、もういちど跳びつこうとする前にしゃがんでなでてやります。また「おすわり」の命令に従えるようになったら、犬がそばに来たら「おすわり」を命じて、しゃがんでほめてやるのもいいでしょう。なにしろ、「跳びついて何もいいことはないが、行儀よくすれば、やさしくしてもらえる」ということを教えればいいのです。

家に来た最初からそのように教えれば、子犬はすぐに覚えます。小さいときに跳びつくことを奨励しておいて、大きくなってから禁止しようとする、もっとずっと手荒な方法をとらなくてはならず、それは犬のためには不親切なことです。

しかるよりもおどろかせてしつける

子犬は、退屈するとたいてい、柱やイスの脚などをゴリゴリとかじります。かじるのが、柱やピアノの脚などのばあい、タイガーバーム（筋肉痛の軟膏）やリスチリン（うがい薬）など、犬のきらいなニオイのものをちょっと塗っておくと、噛まなくなります。ただ、タダ食う虫も好き好きで、タイガーバームやリスチリンをおいしそうになめてしまう犬もたまにいますから、そのときは、何がきらいか、いろいろ試してみなくてはならないでしょう。

イスのように動かせるもののばあい、かじりはじめたらすぐに、黙ってそのイスをガタガタと揺らしてみてください。子犬がびっくりして、あとずさりしたら、オーバーに驚かせて「どうした？ だいじょうぶ？ ケガはしなかった？」と、足でもさすってやります。すると、この経験から、子犬は次のことを学びます。

- ・ このイスは、噛まれるとあばれる
- ・ 自分は今、本当にあぶない目にあった
- ・ この人は、自分を守ってくれる

子犬は、イスの背に人の手がかかっているのが見えていても、人がそれを揺らしていることになかなか気づかないのです。

また、たとえば、ある部屋に犬を入らせないためには、犬が来るのを待ちかまえていて、入ろうとした瞬間にドアやふすまを閉めるのも、効果があります。こちらの姿が見えていても大丈夫。黙って、素知らぬ顔でやるのがコツです。そうすると犬は、「このドアは、犬が通ろうとすると閉まる！」とおもうらしいのです。

どんなに可愛くても身分は人より下

犬の目から見れば、家族はサル山のようなもので、自分の群れのボスは誰で、自分は上から何番目、というように、家族をランクづけ

しています。そして、そのランクを不動のものとおもわず、ときと場合によっては、自分がボスにならなければならないこともある、とおもっています。

犬を飼ったら、犬が自分のことを、人よりも上位だとおもい込まないように、子犬のうちから注意して育てなくてはなりません。自分を群れのリーダーだとおもっている犬は、扱いにくいばかりか、本人も幸せではないのです。

そのような犬は、家族に、「食べものをよこせ」「散歩に連れていけ」「ドアをあける」と指図をしますが、たいいていはすぐに応じてもらえないので、イライラすることが多いでしょう。散歩に出れば先頭を歩き、電信柱のところで立ち止まって好きなだけニオイを嗅ぎ、用がすんだら自分の行きたいほうへ突っ走るの、しばしば飼い主とヒモの引っ張り合いになります。

「敵」とおぼしき犬が接近すれば、自分の群れを守るために勇敢に戦いを挑み、わけのわからない危険があると、たとえば花火がドーンと鳴ったりすると「あぶないぞ！今日はもう引き上げよう！」とばかり、一目散に逃げ帰ります。

そんな犬を見て、飼い主は、あきれたり困惑したりしますが、犬のほうは、一生けんめい群れを守ろうとしているのに、ちっとも協力しない部下をもって、不運だと感じていることでしょう。

だから、犬には、「リーダーはおまえではなく、わたしだ。わたしのそばにいれば安全だし、命令をきいていけば、食べものにも不自由はさせない」と教えるべきなのです。そうすれば、情緒が安定しておだやかな犬になるし、なにより、命令をきくので、いっしょに暮らしやすくなります。

犬に、自分が上位だと勘違いさせないために、日常生活でいろいろと注意すべきことがあります。

たとえば、食事のときに、犬に先にエサをやってから家族が食べはじめてはいけません。たとえ犬のが安もののドッグフードで、人間のがスキヤキでも、犬は、自分のほうがエライから先に食べている、とおもうでしょう。「犬に先にやらないと、人がたべているのを見てほしがる」という人がいますが、生まれてからいちども人の食卓から食べものを分けてもらったことのない犬は、人が何を食べていようと、ほしがることはありません。

ドアや門の出入りは、人が先、犬があとにします。外を歩くときも、犬は人の前に出ないようにするのがいいのですが、これをきちんとしつけるには、訓練用の首輪を使って、服従訓練をする必要があるでしょう。けれども、少なくとも、子犬のうちから、犬のうしろを家族がついて歩くような散歩はしないように気をつけたほうがいいのです。犬が立ち止まればみんなが立ち止まり、犬が走ればみんなが走る、というようなことをすると、イヤでも犬は、自分が家族を引率している、と感じてしまいます。複数の人が散歩をするときは、犬が立ち止まってもほかの人は歩きつづけ、「自分がついて行かないとおいていかれる」と犬におもわせるようにします。

身分をわきまさせると、という意味で、犬には、人間とおなじソファやイスにはすわらせないほうがいいのですが、もしすわせた場合は、犬の席を決めておきます。それでもきっと、犬は、自分の領土を拡大しようとたびたび試みますから、その都度叱らなければなりません。

飼い主の寝床に寝かせるのはやめたほうがいいでしょう。親切のつもりで「わたしのふとんに寝かせてやろう」とおもっても犬のほうは、「わたしの寝床にヒトも寝ている」とおもいます。

いつも飼い主のふとんに寝ている犬が、あるとき、飼い主が寝返りをうつと、怒ってうなり声をあげる、ということが珍しくないのです。そのときに、うなられた飼い主がそれ以上身動きをしなくなると、犬が飼い主をうまく「しつけた」かっこうになり、主従が逆転して、犬はもう人のいうことなどきかなくなります。そんな勘違いをさせないために、はじめから寝床は別にしたほうがいいのです。

人が犬のところへ行くと、なでてやったり食べものを与えたりすると、犬は、「この人はわたしの機嫌をとっている」と感じるかもしれません。何か食べさせたいときは、呼び寄せて与えたり、「おすわり」を命じて、それにしたがったら与えます。甘えてすり寄ってくる時も、「おすわり」や「伏せ」など、できるだけ命令して、ご褒美としてなでてやります。

犬が食べたがるから食べさせ、外に出たがるからドアを開けてやる、というようなことを無条件でしていると、人が犬の命令をきき、一方的に奉仕しているかたちになり、主従関係が逆になります。犬のために何かをしてやるときは、かならず「おすわり」など、何か簡単な命令をして、それに従ったらご褒美としてやる、ということにすれば、犬の、飼い主に対する態度がずいぶんちがってきます。

エサを過剰防衛しないようしつける

エサを食べているときに人が近づくと、うなって威嚇したり、食器の位置をなおしてやろうとして手を出すと、その手を噛んだりする犬がいます。飼い主からもらったエサを食べているくせに、くれた人にこんな態度にできるのは、不愉快だし、威嚇された人が一瞬でもひるんだ様子を見せると、犬は自分のほうが強いことを悟ってしまうので、それからは訓練がむずかしくなります。たいいていの犬は、こうならずすむのですが、念のため、小さいうちに、しつけておきます。

それには、食べているときにエサを足してやって、食事中に人が手を出してくることに慣れさせるとよいでしょう。

まず、おすわりをさせてからエサを半分だけやり、食べるのをそばで見えています。食べ終わったらもういちど「おすわり」と命令し、残りの半分をあてます。

次の機会に、また半分だけエサをやり、こんどはまだ食べ終わらないうちに、強い声で「おすわり」と命令します。そして、もしすわらなくてもかまわずに、食器に残りのエサをそそぎ入れます。それをなんとか繰り返すうちに、食べるのを中断してすわるようになるでしょう。

「はなせ」のしつけは、子犬のうちに

もう一つ、子犬のうちにしつけたほうがいいことは、口にくわえたものを、命令に従って放すようにすることです。

ボールでもスリッパでも、子犬がくわえてきたら、「放せ」と命令して、口から取り上げ、すぐにほめます。無理やり取り上げたとしても、結果的に放したのですから必ずほめます。抵抗しても叱ったりせず、下あごのほうから歯の間に指を入れて口をこじ開け、ものを取り上げて、ほめます。命令するときに「放せ」という言葉は二度までしかいってはいけません。二度目の命令をしたら、絶対に取り上げてください。

これを繰り返すうちに、命令されると、くわえたものをポロツと落とすようになりますから、そうしたら盛大にほめてください。取り上げたものは、また犬に返してやってもいいし、命令をきいたご褒美として食べものをあてたり、別のおもちゃをあててもいいでしょう。

こうして、「放せ」の命令にはしたがわなくてはならないことと、「放せ」がいやな命令ではないことを教えます。これを徹底的にしつければ、口にはいっている食べものも命令されれば吐き出すようになります。そうすると、たとえば、串のついた焼き鳥を床に落としたり犬が拾ってしまったというようなときに、役に立ちます。

以心伝心はダメ、声に出してほめる

犬は、ほめるのも叱るのも「その場で、強く、短く」がいいのです。いつまでも、なでつづけたり、小言をいいつづけても効果はありません。力強く、五秒以内に切り上げます。

犬のしつけで手こずっている人が、いちばん知りたがるのは、どのように叱れば効果があるかということでしょう。たたく、どなる、大きな音を出して脅かす、耳をつねり上げる、水をかける、エサをやらないなど、いろいろと試してみても、「どれも効かない。この犬はバカなんだろうか」とおもっているかたがいることでしょう。

飼い主にほめられても、ちっとも喜ばない犬は、叱られるのも平気です。たたかれても、「痛いなあ。何するんだよ」という顔で見ると、どのように叱るかを工夫する前に、どうほめれば犬が喜ぶかを考えるべきです。主人にほめられたい、と願っている犬は、「コラッ」といわれただけでショックを受けるものです。

犬の訓練の仕方を教えていて、なによりうれしいのは、はじめて会ったときにけわしい顔をしていた犬が、だんだんと、やさしいおだやかな顔つきになっていくのを見るときです。自分の主人がだれで、その人が何を望んでいるかを知っている犬は、安心していて幸せなのです。きちんとしつけて、幸せにしてやってください。

犬を飼っている人に、「うちの犬はしつけに失敗した」「言うことを聞かない」ケースについて体験を聞こう。

兄弟姉妹やいとこ、近所の小さな子供で、いうことを聞かないで困っているケースについて体験を聞こう。

金森さんの、たとえかわいくても犬は身分は人より下、としつけやわきまえを重視する育て方について、賛否とその理由を出し合おう。

時にはわざと椅子をゆすっておどかさす、などの“やらせ”について、そこまでしてもしつけを重視するかどうか、賛否とその理由を出し合おう。

将来、子どもの保護者になったとして、人間の子供を育てる時にあてはめると、厳しいしつけをして育てるかどうかが、意見とその理由を出し合おう。

関連して扱える単元

社会的動物としての人間、教育の義務と権利、など

筆者の教室では...?

犬のしつけについては、けっこう苦心している生徒の声を聞かされる。「家族の中で、私の言うことだけ従わない」「思えば、散歩の時に犬の後ろをついていった」「人間より先に食事を摂らせた」「うちの犬は、“隣人”にしてしまったかも」など、著作を読んで気づいたという声もよく出される。

また、論点を人間に変えると、前課とはうって変わって、幼少期のしつけは多少厳し目の方がよい、という立場が増えることもしばしば経験する。「小さい子供になめられた」「妹の物を借りる時、深々と頭を下げる」など、年功序列の逆転について切実な体験も聞かされた。犬人間という順序で考えると、保護する者の立場からもしつけや育て方について考えることがスムーズになるようである。導入部では、動物に関心の少ない生徒の意識作りのために、一頭の犬の絵をかいいて、何でも好きなものを付け加える(実は、それが今の自分がしてほしいこと)、という心理テストを用意することもある。

この頃になると、教師のコントロールを外れて、自由形態での議論を生徒たちが欲しているサインが見られることもある。教師による司会の深浅の臨機応変の判断が重要になると感じている。

第9課 「自由」の国際比較

<日本・アメリカ・中国の高校生の規範意識> 日本青少年研究所		
「本人の自由でよい」と回答した者の割合		
先生に反抗すること	親に反抗すること	人を脅して金品を取ること
日本：79.0 %	日本：84.7 %	日本：9.2 %
アメリカ：15.8 %	アメリカ：16.1 %	アメリカ：8.1 %
中国：18.8 %	中国：14.7 %	中国：1.6 %
人を傷つけて金品を取ること	小額のものを万引きすること	覚せい剤や麻薬を使うこと
日本：7.3 %	日本：10.5 %	日本：11.4 %
アメリカ：6.5 %	アメリカ：13.2 %	アメリカ：19.6 %
中国：0.9 %	中国：1.8 %	中国：1.2 %
学校をずる休みすること	売春など性を売り物にすること	
日本：65.2 %	日本：25.3 %	
アメリカ：21.5 %	アメリカ：(調査から除外)	
中国：9.5 %	中国：2.5 %	

設問について、自分ならどう回答するか、意見とその理由を出し合おう。

「日本では既に、相当『自由』の考え方が、行き過ぎているのではないか」という見方について、賛否とその理由を出し合おう。

日本は、“自由”な雰囲気のある国なのだろうか？ ...それとも“不自由”な雰囲気のある国なのだろうか？岡本氏、椎名氏・野田氏の“日本は不自由”という立場を思い出し、どちらが正しいか、意見を出し合おう。

その後の調査の結果の推移について、さらに調べてみよう。

関連して扱える単元

世界の教育開発、国際連合の組織、世界の学校比較、南北問題、など

筆者の教室では...？

「え、アメリカよりも割合が高いの...！」と驚く声が、きまって多数から上がる。子供だけの“お泊り”“外出”“留守番”などについて、

アメリカでは法律で禁じられている事例などについて、帰国生徒たちから話を聞く機会は貴重である。保護者の同伴無しで出かけたことの無い生徒、登下校を子供だけでしたことがない生徒、などから話を聞くこともある。子供たちは友達どうして打ち解けていても、この手の情報交換をすることは意外に少なかったりするようだ。また、“アメリカでは自由なんだ”“千里に来たらそのアメリカ流にしなければならんだ”と思いついた保護者や生徒が、アメリカでは絶対しないような“自由”行動をして苦い目に遭った、という事例もあるので、その手の勘違いが無いように話しておくよい機会が毎回出来る。

なお、麻薬について「本人の自由」であると自らも答える、という生徒が毎年少なからずある。強い習慣性、数年経ってからのフラッシュ・バック、コロンビアの麻薬戦争の事例などを紹介しつつ、“社会悪”という観点を養わせることの重要性を痛感する。科内の別の教員は、「本人どうしがよくても、社会的には良くない」事例として、贈収賄犯を手引きにしている。行き過ぎた個人主義、それもアメリカの個人主義（理想としてきた）とも似て非なるものが、日本社会には幻影として跋扈している、という視点を得させることも、生徒の将来を守るために忘れてはならない通過点の一つであると思われる。

第10課 「“コンビニ” 高校事件」

ビデオ内容... 静岡県のC高校で、暴力やいじめが頻発し教員の対応能力を超えたため、校内100ヶ所以上に監視カメラが取り付けられた。そのため事件は減少したが、教育のあり方として問題がある、との抗議が寄せられ、学校側は装置を止めた。

この学校のとった手法について、賛否とその理由を出し合おう。

をもとに、もう少し深く、暴力やいじめの防止と、プライバシーの関係について話し合ってみよう。

賛成的な見解に対して... プライバシーの面で嫌がる生徒や保護者を、どう説得するか立案してみよう。

反対的な見解に対して... その代わりに、いじめや暴力をどうやってなくしていくのか、立案してみよう。

関連して扱える単元

プライバシーの権利、検閲の是非、管理社会の功罪、情報公開制度、個人情報保護、など

筆者の教室では...?

このやり方にはさすがに反対論が多い。「真面目な生徒が安心できる」という意見もあるが、多くは「誰かにいつも見られているのは息苦しい」「先生が忙しいのは解るがカメラはあんまりだ」「学校外にいじめや暴力の場所が移るだけ」などである。しかし、では代案を出すとなるとなかなか難しい。“荒れている”学校を知らない生徒と、経験のある生徒では反応が異なってくる。

第11課 スクール・ポリス

ビデオ内容... アメリカ西海岸のある学校では、ナイフや拳銃を持ち込む生徒が居るため、学校専門の警察官を常駐させている。パトロール中に不審な生徒を発見したり、通報が寄せられたりすると現場にすぐに駆けつけ、生徒から武器を取り上げ、生徒を縄で縛って身柄を確保する。キャンパスの生徒たちはスクール・ポリスについて、様々な声をインタビューに寄せる。

「スクール・ポリス」の制度について、賛否とその理由を出し合ってみよう。

私たちの学園にも、「スクール・ポリス」を雇うべきかどうか、意見を出しあってみよう。

関連して扱える単元

警察の権限、逮捕の要件、捜査令状のしくみ、被疑者の権利、など

筆者の教室では...?

教育の場に警察が入ることについて、私自身は相当抵抗があると予想していたが、生徒たちの答えは意外に肯定的なもの（「まじめな生徒が安心して学校で過ごせる」、「警察は力が強いので、先生が出来ない措置してくれる」、「教える人としつけをする人は、別々の方がよい」、

など)が多い。

アメリカでは、教員の間でも、警察が学校内の出来事に介入することについてあまり抵抗が無い、とも聞く。本校で勤務する、アメリカの指導の困難な学校出身のある教員は、「日本へ来て、生徒の“Gun”の問題がある」と聞いて、ここでもか、と驚いたが、よく聞くと“Gun”の問題だった」という笑い話を紹介してくれた。ナイフや銃の検査から学校の日が始まる、という環境で勤めていたそうである。

一方、おそらく古くからの日本の学校風土になじみの深い教員は、教育の場である学校に権力機関である警察が入ることについてはかなりの心理的抵抗があるだろう。筆者が以前勤めた学校では、禁止されているバイク通学の指導に手を焼き、場合によっては車両ナンバーから所有者を警察に問い合わせる、という案件について、指導の一端を警察に委ねることの可否について、職員会議でかなり緊迫したやりとりがあった。教育をテーマにしたTVドラマにおいても、熱血教師が警察から生徒を守る、という描き方のものが比較的典型ではないだろうか。(筆者の経験では、青少年担当の警察官は、多くの場合実に法律を理解し、生徒や家庭、学校の立場を重視し配慮のある方が多いように思う。)

学校への侵入者による犯罪が相次ぐ一方、重大犯罪への対応による人員配備策の変更などから「交番」がかつてのように機能していない実態をもとに、少子化による空き教室の活用と犯罪抑止の面から「学校の中に交番を配置するとよいのでは」という知人の案がある。これについて生徒に聞いてみる時もある。

第12課 軽犯罪法~大人の“校則”

「軽犯罪法」を読んでみよう。

軽犯罪法 (昭和二十三年五月一日法律第三十九号)

最終改正：昭和四八年一〇月一日法律第一〇五号

第一条 左の各号の一に該当する者は、これを拘留又は科料に処する。

- 一 人が住んでおらず、且つ、看守していない邸宅、建物又は船舶の内に正当な理由がなくてひそんでいた者
- 二 正当な理由がなくて刃物、鉄棒その他の人の生命を害し、又は人の身体に重大な害を加えるのに使用されるような器具を隠して携帯していた者
- 三 正当な理由がなくて合かぎ、のみ、ガラス切りその他他人の邸宅又は建物に侵入するのに使用されるような器具を隠して携帯していた者
- 四 生計の途がないのに、働く能力がありながら職業に就く意思を有せず、且つ、一定の住居を持たない者で諸方をうろついたもの
- 五 公共の会堂、劇場、飲食店、ダンスホールその他公共の娯楽場において、入場者に対して、又は汽車、電車、乗合自動車、船舶、飛行機その他公共の乗物の中で乗客に対して著しく粗野又は乱暴な言動で迷惑をかけた者
- 六 正当な理由がなくて他人の標灯又は街路その他公衆の通行し、若しくは集合する場所に設けられた灯火を消した者
- 七 みだりに船又はいかだを水路に放置し、その他水路の交通を妨げるような行為をした者
- 八 風水害、地震、火事、交通事故、犯罪の発生その他の変事に際し、正当な理由がなく、現場に出入するについて公務員若しくはこれを援助する者の指示に従うことを拒み、又は公務員から援助を求められたのにかわらぬこれに応じなかつた者
- 九 相当の注意をしないで、建物、森林その他燃えるような物の付近で火をたき、又はガソリンその他引火し易い物の付近で火気を用いた者
- 十 相当の注意をしないで、銃砲又は火薬類、ボイラーその他の爆発する物を使用し、又はもてあそんだ者
- 十一 相当の注意をしないで、他人の身体又は物件に害を及ぼす虞のある場所に物を投げ、注ぎ、又は発射した者
- 十二 人畜に害を加える性癖のあることの明らかな犬その他の鳥獣類を正当な理由がなくて解放し、又はその監守を怠つてこれを逃がした者
- 十三 公共の場所において多数の人に対して著しく粗野若しくは乱暴な言動で迷惑をかけ、又は威勢を示して汽車、電車、乗合自動車、船舶その他の公共の乗物、演劇その他の催し若しくは割り当物資の配給を待ち、若しくはこれらの乗物若しくは催しの切符を買い、若しくは割り当物資の配給に関する証票を得るため待つている公衆の列に割り込み、若しくはその列を乱した者
- 十四 公務員の制止をきかずに、人声、楽器、ラジオなどの音を異常に大きく出して静穏を害し近隣に迷惑をかけた者
- 十五 官公職、位階勲等、学位その他法令により定められた称号若しくは外国におけるこれらに準ずるものを詐称し、又は資

格がないにもかかわらず、法令により定められた制服若しくは勲章、記章その他の標章若しくはこれらに似せて作った物を用いた者

十六 虚構の犯罪又は災害の事実を公務員に申し出た者

十七 質入又は古物の売買若しくは交換に関する帳簿に、法令により記載すべき氏名、住居、職業その他の事項につき虚偽の申立をして不実の記載をさせた者

十八 自己の占有する場所内に、老幼、不具若しくは傷病のため扶助を必要とする者又は人の死体若しくは死胎のあることを知りながら、速やかにこれを公務員に申し出なかつた者

十九 正当な理由がなく変死体又は死胎の現場を変えた者

二十 公衆の目に触れるような場所で公衆にけん悪の情を催させるような仕方であり、ももその他身体の一部をみだりに露出した者

二十一 削除

二十二 こじきをし、又はこじきをさせた者

二十三 正当な理由がなく人の住居、浴場、更衣場、便所その他人が通常衣服をつけないでいるような場所をひそかにのぞき見た者

二十四 公私の儀式に対して悪戯などでこれを妨害した者

二十五 川、みぞその他の水路の流通を妨げるような行為をした者

二十六 街路又は公園その他公衆の集合する場所で、たんづばを吐き、又は大小便をし、若しくはこれをさせた者

二十七 公共の利益に反してみだりにごみ、鳥獣の死体その他の汚物又は廃物を棄てた者

二十八 他人の進路に立ちふさがつて、若しくはその身边に群がつて立ち退こうとせず、又は不安若しくは迷惑を覚えさせるような仕方他人につきまとつた者

二十九 他人の身体に対して害を加えることを共謀した者の誰かがその共謀に係る行為の予備行為をした場合における共謀者

三十 人畜に対して犬その他の動物をけしかけ、又は馬若しくは牛を驚かせて逃げ走らせた者

三十一 他人の業務に対して悪戯などでこれを妨害した者

三十二 入ることを禁じた場所又は他人の田畑に正当な理由がなく入つた者

三十三 みだりに他人の家屋その他の工作物にはり札をし、若しくは他人の看板、禁札その他の標示物を取り除き、又はこれらの工作物若しくは標示物を汚した者

三十四 公衆に対して物を販売し、若しくは頒布し、又は役務を提供するにあたり、人を欺き、又は誤解させるような事実を挙げて広告をした者

第二条 前条の罪を犯した者に対しては、情状に因り、その刑を免除し、又は拘留及び料金を併科することができる。

第三条 第一条の罪を教唆し、又は幫助した者は、正犯に準ずる。

第四条 この法律の適用にあつては、国民の権利を不当に侵害しないように留意し、その本来の目的を逸脱して他の目的のためにこれを濫用するようなことがあつてはならない。

附 則

1 この法律は、昭和二十三年五月二日から、これを施行する。

2 警察犯処罰令（明治四十一年内務省令第十六号）は、これを廃止する。

まずは、第1条の「違反行為」の34の項から、いくつかの項を読んで、感想を出し合ってみよう。

実際に違反している人を見かけた、自分で違反していた、という情報を交換してみよう。

大人の世界にも、学校の細かい校則に似た規則があることについて、どう思うか感想を出し合おう。

第4条の「濫用の禁止」の条を、特に注意して読んでみよう。

これだけ具体的・詳細に違反事例を挙げていながら、なぜ第4条で“なんでもかんでも捕まえてはならない”としているのか、理由を考えて意見を出し合ってみよう。

関連して扱える単元

治安維持法、身体的自由（別件逮捕、代用監獄、被疑者の権利）通信傍受法盗聴法や共謀罪の議論について、など

筆者の教室では...？

第1条からよく取り出して考えるのは、四、十二、十三、十四、二十、二十二、二十六、二十八、である。「え、これなら違反している人、たくさん見たことがあるよ」という反応がよく出される。割り込みや服装、騒音などについては、生徒同士が笑いながら「違反ね!」と互いに指摘し合うこともあった。

問 はさすがに難問で、治安維持法など日本の歴史についての既習事項を、教師からヒントとして出さねばならないことが多い。

第13課 『グレートバリアリーフでの冷や汗』～「自由」と能力・経験・技能～

グレートバリアリーフでのひや汗 中村征夫

僕は作家の椎名誠さんとテレビの仕事で一緒にグレートバリアリーフのドロップ・オフに潜ったことがある。いったい深い海はどのようになっているのか潜ってみようというわけだ。

椎名さんのこれまでの深度記録は二〇メートルとかで、このときの海は果てしなく深く、軽く一〇〇〇メートルは越えていた。潜るのは椎名さんとインストラクターが四名に僕で計六名だ。椎名さんにはデイビットというインストラクターがピッタリと寄り添い、僕にはグラハムというインストラクターがついた。彼は、水深五〇メートルまできたら僕の方を叩いて合図をくれることになっている。僕の役目は、とにかく椎名さんの潜水ぶりをフォローし、ギブアップしてもそのまま今度は二人のインストラクターを写しながら水深五〇メートルまで足から一気に落ちていく、というものだった。椎名さんは水深三五メートルでわれわれにさよならを告げた。

僕は大きくて重いビデオカメラを構えたままどんどん落下した。二人のダイバーより僕のほうがはるかに落下するスピードが速い。だから、画面はいつも上向きに撮影することになる。やがてグラハムが思いっきり右肩を叩いてきた。終了だ。われわれ四人は約一〇メートルほど上昇した。そこに美しいサンゴがあったので、僕は二人に照明してもらい、撮影しようとした。そのとき、われわれより深いほうから白い泡が上昇してくるのを見つけてびっくりした。
「誰だ!」

どす黒く深い彼方を注意深く見ると、そのダイバーは小型のビデオカメラを持っている。

「ナ、ナカジマさん…」

僕はギクッとした。中島光男カメラマンがたった一人でわれわれよりはるかに深いところにいる。その水深をとっさに計算したが、六〇メートルは潜っている。

中島さんは陸上のベテランカメラマンだ。しかし、水中撮影の経験はほとんどない。今回の仕事は二時間のドキュメンタリー番組で、水中がメインであるため、二台の水中カメラが用意された。僕が主にテレビカメラ用の大型カメラを使用し、中島さんは水面下などの浅いところをホームビデオの小型カメラでおさえるという話であった。しかし、僕は浅ければ浅いほど水中撮影はむずかしいんですよ、ディレクターに告げている。波やウネリの影響を受けやすく体が安定しないのだ。

このとき、初めは中島さんも一緒に潜る予定ではなかった。ところが、全員スタンバイするところから、中島さんも潜って、浮上してくる椎名さんを水面近くで撮影することになったらしい。

長いこと水中撮影をしていたり、ダイビングのインストラクターをやっていると、海岸やボートの上でウエットスーツを着たり、器材をセットする格好を見ただけで、その人の技量がわかってしまう。だから、悪いと思ったが、中島カメラマンにどれくらい潜った経験があるのか聞いてみた。

「プールでちょっとやって、それで海でも一〇メートルくらい潜ったかな?」

という返事だったのだ。それが今、水深六〇メートルもの大深度に一人でいる……。

僕はあせった。中島さんはまだまだ落下している様子である。僕はでかいカメラを手にして動けないから、二人のインストラクターに、

「上げるお!」

と叫んだ。船のオーナーでもあるモローが潜っていた。これで助かったと思った。しかし、なんとしたことか、モローはあと五メ

ートルというところまで潜りながらそれ以上潜降しようとはしなかった。

「何してんだあ！」

と僕は再び叫んだ。

「ダメだこりゃ！」

と今度は僕のすぐ前にいる男に、

「行けえ！」と合図した。

もうそろそろ中島さんの空気はなくなるはずである。潜水経験の浅い人はわれわれの半分も空気は持たない。それは落ち着いた上手な呼吸ができずに、常に「スウ、ハー」と休むことなく呼吸しているからだ。それに今ごろは、当然のように窒素酔いにかかっているはずである。おそらく精神状態はモーローとして、自分が何をしているのかもわかっていないはずだ。だから一刻も早く引き上げねばならない。ドロップ・オフの恐ろしさはこういうところにもあるのだ。

ところが、もう一人の男は動こうとしない。そういえばこいつはいつも偉そうなことばかり言っているインストラクターだと気づき、こりゃ無理だとあっさりあきらめた。数日前のサメの撮影のとき、この男イアンは僕の後ろに配置が決まられていて、僕の後方から迫ってくるサメを追い払う役目のはずだった。餌を用意しているからサメは何十匹と現れ、狂ったようになる。ところがイアンはあっという間にその場を逃げ出し、安全地帯にいる椎名さんに寄りそっていたのだ。

「この腰抜けめ！ 中島さんが死ぬぞ！」

僕はあと一人、頼みの綱であるグラハムに助けを求めた。しかしグラハムも動かなかった。

「もう限界だ！」

僕はテレビカメラをグラハムに投げつけた。そして一気に中島さんに向かって潜った。モーローはすでに仲間の近くまで浮上している。助けるのが怖いのだ。もし、しがみつかれたらどうしよう……などと、いろいろ考えたのだろう。

「日本人はやっぱり日本人が助けるしかないのか。お前たちは何のために来てるんだ」

とわめきながら潜った。僕の空気はまだ八〇気圧、ちょうど半分ほど残っている。中島さんに近づいた。なんと、彼はまだカメラを構えたままのスタイルで静かに落下していた。さすがプロ根性だ。

やがて中島さんは、タンクの空気を入れて浮力を保っていた救命具のマウスピースを高くかかげて一気に全部の空気を排出した。

「な、なにをするの」

これを水中逆噴射という。中島さんの体は空気を排出したためにさらに加速をつけて落下した。すでに七〇メートルは越えているだろう。僕は彼の胸ぐらをつかんだ。完全に窒素酔いだ。僕はあわてて彼の救命具に空気を送り込み、浮力をつけて上げてきた。もうろうとしている中島さんをモーローに引き渡し、このまま二人で浮上するように合図した。中島さんのカメラはとうの昔にフィルムアウトになっている。僕は再び撮影を開始し、約束の仕事を終えた。

それでも潜りたい

ボートの中で中島さんと眼が合った。しかし、何も言わない。怒っているふうでも、困っているふうでもない。いつもの変わらぬ表情だ。これはまずい。海の怖さに気づいていない……。

「中島さん、何メートルくらい潜っていたと思います？」

と聞くと、

「二〇 三〇メートルくらいかな？」

という返事が返ってきた。

「もうすこしで危ないところでしたよ。六〇メートルから七〇メートルかな」

「ええ？ そんなに潜っていたの？ いや、途中から中村さんがきたから、これはただごとじゃないなと思ったんだけど……」

自分が救命具の空気を抜いたことも覚えていなかった。そして、腰にウエイトを何キロつけていたかと聞くと、浅い海中で潜るときと同じく六キロだと言った。これはもう自殺行為だ。

普通水深一〇メートルを越えると、自分の体はどんどん沈みがちになる。だから、水深二〇メートルまでなら五キロ程度のウエイトが必要でも、四〇 五〇メートルとなると落下するスピードが増すため、ウエイトは三キロか四キロで充分なのだ。最近のダイバーは全員救命具のBCDに空気を送り込んでオーバーウエイトでも水中でバランスを整えられるが、何度も空気の出し入れをしていると、それだけ空気が消耗するわけだ。

夕食前のボート内も戦争だった。

「なんで中島さんを助けなかったんだい」

と僕は彼らに嘔み付いた。

「ナカジマは潜る予定ではなかった。潜るほうが悪いんだ」

と激しく言ったのがあの腰抜け男のイアンだった。僕がさらに詰め寄った。

「だからといって助けなくてもいいのか。あんたはあの状況を見て普通だと思ったのか、えっ！どうなんだよ。一応インストラクターなんだから！」

「ワレワレは、任された任務だけを忠実にやる義務がある。ナカジマはなんであそこにいたんだ。潜らなければよかったんだ」と腰抜けもゆずらない。

「じゃあ、サメのときはなんで逃げたんだ」

と負けずに叫んだ。

たまりかねた通訳の大沢君が言った。彼はブリスベンのクイーンズランド大学でコアアラやカンガルーの研究にたずさわる大学生だから常に穏やかである。

「中村さん、これはもう水かけ論ですよ。日本人と外人の考え方の相違ですよ」

僕も、本当にそうだと、くやしうけど納得せざるを得なかった。これからは、今まで以上に綿密な段取りをとるよう全員一致で可決された。

窒素酔い

深く潜ったことのないダイバーが、水深三〇 四〇メートルも潜ると、突然アルコールや睡眠薬を飲んだような状態になってしまう。もちろん個人差もあるが、これを窒素酔いという。潜水病とは別で、すぐ治る症状である。窒素酔いになると、ポオッとしたり、急に気分がおおらかになったりして、中には自分が何をしているのかまったくわからなくなる人もいらしい。しかし、窒素酔いらしいなと思ったら、わずか数メートル浮上すれば気分はすっきりしてくる。そして、さっきの水深まで潜ると、また酔い始めることがある。これは慣れによって解決されるが、初心者のダイバーなら四〇メートルまで潜ると、ほぼ一〇〇パーセント窒素酔いになるといわれている。

ダイビングをする人があれば、どんなスポーツか聞いてみよう。

初心者なのにふさわしくない行動をとって、怪我をしそうになったり死にそうになったりした経験を出し合ってみよう（水泳や、ダイビング以外の時でもよい）。

この事故は、誰に最も「責任」があるか、意見とその理由を出し合ってみよう。

をもとに、「責任」についてももう少し深く考えてみよう。

初心者のカメラマン本人の責任と考える立場...初心者にとどこまで責任を問えるだろうか。

周囲の人間の責任と考える立場...自己責任でなければわざと無茶をする人もあるが、それでよいか聞く。

初心者に対しても無条件に「自由」でよいかどうか、意見とその理由を出し合ってみよう。

“自己責任論”について、賛否とその理由を出し合ってみよう。

関連して扱える単元

自己責任論、当事者能力、「責任」と文化の違い、など

筆者の教室では...?

毎回、クラスに数人、もう少しで死にそうな目に遭った生徒がいるので、親近感のある話題とすることができる。また、欧米文化圏の滞在経験生徒は、渡航当時「自己責任」について結構ショッキングな文化体験（助けを求めないとほうっておかれる、遠慮してNOという本気にされる、など。しかし、転校当時はほとんどの生徒が温かく受け入れてもらった経験をしており、日本での一般的な転校生の待遇よりも一般に手厚いようである。）をしていることがあり、そのエピソードを共有する中で、生徒同士の“文化交流”が深まることも多々ある。

“自己責任論”については、意見が毎回分かれることが多い。

賛成論は、「人はそもそも最期は自分しか頼れない」、「わがままで他人に迷惑をかけるのはたとえ初心者でも良くない」、「人が守ってくれると思うとわざと無茶をする人も居る」

反対論は、「死にそんな人を助けないのは人の道に反する」、「初心者に対する見守りやケアは当然」、「初心者はわからないから責任を

負えといっても無理、
...などの理由を挙げている。

第14課 「自由」池で泳ごう

心理テストだと思って、次の問いに答えてみよう。
自分が、一生の“自由”を使って、水泳の達人になろうと決心したとする。
しかし、生まれつき泳ぎの才能があるかどうかは、まったくわからない。
もしかすると天性の才能があって、いきなり飛び込んでもスイスイ泳げるかもしれない。
もしかするとまったく才能がなくて、いきなり飛び込んだらそのまま沈んで死ぬかもしれない。
けれども、一生かけて、水泳の達人になろう、と心に決めた。
...その時、あなたが練習場所として選ぶ場所は、次の3種類の池のうちどれ？



A池：まったく自然のままの池で、人間の手がつかない。「Swim at Your Own Risk」の札が立っている。
B池：A池と同じ池だが、フェンスがめぐらされ、水温や岩など危険事項について注意書が掛けられている。
C池：A池と同じ池だが、フェンスと注意書きの他、監視員が居て、危険を見つけて知らせてくれる。

それぞれ選択の理由を、互いに聞いてみよう。
それぞれの立場から、他の立場について、意見・質問を出し合ってみよう。
この図の元になったエピソードを聞いて、身近な世界にあてはめて考えてみよう。
実は、それぞれの池の図に、実際のモデルがあった。

- A池：カナダの国立公園内の湖で、まったく自然のままだが、立て札一本だけ立てられていた例。他にも、オーストラリアの海岸、ハワイの海岸に類例があった。景観を損ねないのでよい方法と思われたが、たいてい相当の自信がないと泳げないような場所だった。
- B池：少年時代に「隣人訴訟」や「河川管理訴訟」が相次いだ時、いつも遊んでいた近所の池や川に、急にフェンスが立てられ始めた経験から。
- C池：台風接近間近の九十九里海岸に、知らずに遊びに行ったときの経験から。ビーチガードが遊泳禁止を放送で訴えているのに、数分おきに目を盗んで海に入ろうとするサーファー達があって、再度ビーチガードが警告する、という様子を何時間も繰り返していた。死んでもいいから泳ぎたい奴には泳がせてやってもいいのに、とやじ馬の視点から思ったが、ビーチガードには絶対に自分の浜で人を死なせない、というプライドもある事を知った。なお、海難事故は山岳での遭難とは異なり、互いに無償で助け合うことが基本原則らしい。

「自由」・危険・責任の関係を、図式にまとめる。

関連して扱える単元

自由と責任の関係、安全管理と自己責任、義務と権利、など

筆者の教室では...？

A 池とC 池の両極に、選択が分かれることが多い。

A 池選択の理由...「達人になるためならワイルドな環境が最適」、「人の助けが無くても泳げるようにならないと真の達人にはなれない」、「自然の中で鍛えられてこそ本物になる」、「これでダメならもともと才能が無かった」、「一生の目標なら、思い切って飛び込んで仮に死んでも本望」、など

B 池選択の理由...A とC の中間的な発想が多い。（「人に見守られると過保護」、一方「何もないと不安なので、自分で気をつけることを理解して練習するのがよい」、など）

C 池選択の理由...「もしも事故死したら達人になるという目標が達成できない」、「最初から無理をする必要はない」、「熟練には段階が必要」、「はじめは人の手助けを借りた方が安心して上達できるので恥ではない」、など

抽象題の展開に関して、心理テスト方式が導入部でイメージの具体化の威力を発揮するためか、これまでの課の中で最もディスカッションがヒートすることもしばしばである。

第15課 “一「？」”の自由

この一「時間」，“自由”にしてよい、と言われると、何をしますか？

ブレン・ストーミング形式で、答をどんどんと挙げてみよう。協力して、順に白板に答を記録していこう。

* 白板記録の事例

一時間	一日	一週間	一ヶ月		
外で遊ぶ、トランプ 寝る、宿題をする、 おしゃべり、読書、 ぼうっと、マンガ、 ゲーム、おやつ、 サッカー、鬼ごっこ、 音楽を聴く、体育の 着替えを先にする	でかける、寝る、 妹と遊ぶ、 ビデオを見る、 野球をする、 買い物、ケーキ作り、 ギターを弾く、 ゲームをクリア、	旅行に出る、 身体を鍛える、 自転車が出かける、 絵を描く、 ピアノの練習、			

“一”のあとの単位が変わっていく。同じように次々とアイデアを挙げてみよう。

今日一「日」，“自由”にしてよい、と言われると、何をしますか？

この一「週間」，“自由”にしてよい、と言われると、何をしますか？

この一「ヶ月」，“自由”にしてよい、と言われると、何をしますか？

この一「年」，“自由”にしてよい、と言われると、何をしますか？

最期に、一「生」，“自由”にしてよい、と言われると、何をしますか？

ブレン・ストーミングが終わったら、内容・数などの面から、答えの傾向をみつけてみよう。

さらに、皆さん（日本など先進国の子供たち）は、本当は、一「生」自由なのではないだろうか。

そう自覚していなくても、時間やお金の面からすると、世界で一番自由な環境にあるのではないだろうか。

考えて、意見を出し合ってみよう。

関連して扱える単元

サルトル哲学（人は自由の刑に処されている）、ブレン・ストーミングのスキル習得、など

筆者の教室では...？

一時間では、ボール遊び、休憩、試験勉強、おしゃべり、...と数十種類の希望が出され、書き取るのに悲鳴を上げるが、時間が長くなっていくたびに回答数が減り、内容も抽象的になっていく（一「生」の部門では、金持ちになる、人のためになる、冒険をする、など）それがなぜか聞くと、結構真剣に考え込む。世界で一番自由なのは、と突っ込むと、しんと考えこんでしまう。

インド人の先生が居るので、聞いてみた話を紹介している。「インドでは、ちょっとくらい学校でいじめられたりいやな事があっても、それだけで学校へ行かない、という子どもは考えられないよ。日本の子供たちも大変なのも解るけど、インドでは、学校へ行ける、というのは大変な特権なんだ。貧しくて食べるのが精一杯の子供たちや、学校へ行かないで働かなければやっていけない子供たちにとって、字や計算を教えてもらえる、というのはすごいことなんだ。」

第16課 私たちの学園生活と「自由」

私たち千里国際学園(当時 千里国際学園・大阪国際文化中学高等学校 OIA)の、昔の『生徒ハンドブック』を、今と同じところ、違うところなどに気をつけながら、改めてじっくり読んでみよう。

千里国際学園の基本方針

5つのリスペクト

Respect for Self	自分を大切にする
Respect for Others	他の人を大切にする
Respect for Learning	学習を大切にする
Respect for the Environment	環境を大切にする
Respect for Leadership/Authority	リーダーシップを大切にする

千里国際学園での3つの禁止事項

千里国際学園は、できるだけ生徒の自主性を尊重する考え方をとっていますが、校舎の建物の様子や、個々の教員の千里国際学園に来る前の経験などから、次の3つの禁止事項を置いています。

1. スケートボード
2. 有害薬物など
3. チューイングガム

この他に、個々の授業やそれぞれの活動に適したルールを、担当の教員や校長・教頭先生らが作る場合があります。それは例えば「学習を大切にする」ということが、図書館と体育館ではそれぞれどう考えればよいのか、実際には違って来るからです。校内のいろいろな場所や教室でのルールを作るときには、担当の教員は生徒の参加を求めることが普通です。

OIAと「世界人権宣言」

Universal Declaration of Human Rights 世界人権宣言

Article 2 第2条

Everyone is entitled to all the rights and freedoms set forth in this Declaration, without distinction of any kind, such as race, colour, sex, language, religion, political or other opinion, national or social origin, property, birth or other status.

どのような人にも、権利や自由があり、その人がなに人か、肌がなに色か、男か女か、どんな言葉を話すか、なにを信じるか、なにを言ったり言いたがっているか、世界のどこから来たか、金持ちか貧しいか、どんな生まれか、身分は何か、などのことで差別されない。

(* 宣誓日英文など省略)

署名 Signature (見本 Sample)

OIAと「自由」について

千里国際学園が、のどかな小野原の丘の上に、まだ100人にも満たない生徒を集めて、手探りの中スタートしたのは、この改訂版ハンドブックが出される5年前のことでした。当時は学園の生徒も教員もみんながほぼ互いに顔見知りで、「他人であっても、他人ではないようなつきあい方」ができました。

それから学園を囲む周りの環境も変わりましたが、なんといっても学園の一番の変化は、人が増えたことです。朝から晩まで、見るもの出会うもの、みな人、人、人です。良くも悪くも「自分一人くらい、居なくてもわからないのでは」と感じる人もいるかも知れません。こんな状況の中で、5つのリスペクトを互いにしっかり守っていくことには、相当の決意と覚悟が必要です(努力なしで、世界のいろんなところで過ごした人達が急にいつも仲良くできるわけがありません) ...ただ、日本の国内の一般の学校と比べると、それでも人数がずっと少なく、1クラスあたりの生徒人数もずっと少ないのです。

「千里国際学園は自由な学校」ときいて何かを勘違いし、だらけて羽目をはずしてしまう人がいます。実はこの学園は、未成年の生徒たちに「自分で自分の責任を負う」という大変なことを求める、日本でも有数の厳しい学校といえるかもしれません。「人は自由の刑に常に処されている」といった哲学者がいましたが、その言葉がまさに私たちの学校にあてはまるのかも知れません。

日本では、残念なことに学校の荒廃が進み、わかっているだけで1年間に約15万件のいじめが発生し、約7万5千人の生徒が不登校になっています。千里国際学園のやり方を「今の若者にそんなことができるわけではない」「そんな甘いやり方はもう通用しない」「いばらの道」「暴拳」と笑いとばす人がいます。というも実際に、「自由な学校」を目指して大失敗し、とても評判の悪い学校になってしまった例が日本にはいくつかあるのです。

それでも何とか5年間、多くの人々の自覚や努力・協力で、千里国際学園は、基本的に当初の考え方を大きく変えずに、これまでやってこれました。

OIAの学校生活の初心

OIAの教員たちは、開校の初年度に、これまでの多くの国内の学校が、なぜ息苦しく居づらくなってしまったのかよく考えて、議論をしました。例えば、細かい校則をたくさん作ったり、なにか問題があるとすぐ校則を増やしたり、校則があるからとよく話も聞かないで生徒を叱りつけたり、教員だけでルールを決めてしまったり、一部の人の問題なのに全員が悪いように言ったり、全校放送でいきなり呼びつけて説教をしたり、どこまでが良くてどこからが違反かきりのない議論をしたり、何回違反したらどういう目に合うのか点数制を作ったり...、こういう「校則」を中心にした考え方では、教員と生徒がいがみ合うようになってしまえばかりか、本当に自立した個人や過ごしていて気持ちのよい環境の学校を創ることはできないと考えました。

OIAの生徒部では、これまでのところ、学校生活でのマナーについて、基本的には次のように考えてきました。

- (1) 生徒個人のしつけや常識的なことがらについては、原則として本人と保護者の責任とする。
- (2) 生徒は自分の判断に自分で責任を持って行動し、自分のものは自分で管理する。
- (3) 問題が発生したときには、よく話し合いをし、原則として「個別に」対処する。

(4) インターナショナル・スクールのやり方で行なわれている活動に参加するときは、OIAの生徒・教員もOISのやり方に従い、OIAにないものを学びとる。

(5) 千里国際学園全体もそうだが、OIA単独でも「日本の」学校ではなく多文化教育の学校なので、日本だけで通用するような考え方はルールを作らない。

(6) 各教員は各自の判断で指導する。また、同じOIAの教員であっても、授業や学校生活のマナーに対する考え方が違うことを、生徒に理解させる。

(7) 考え方や文化の違いを原因にする暴力行為に対しては、特に厳しい姿勢で臨む。

このような考え方は、先ほど掲げた「世界人権宣言」の精神に基づくものと考えています。(もちろん、これらについて反対する人がいなかったわけではありませんし、これからもずっと今の考え方が正しいと考えているわけでもありません。)

生徒の皆さん、いつも「世界人権宣言」の精神を心に留めて行動するように努めて下さい。また、生徒の自主性が大幅に尊重されている恵まれた環境で学ぶことができる者の責務として、この宣言の考え方を将来できるだけ多くの人々に伝え広めて下さい。

最後に、これまでの5年間の学校生活での経験から、初めてOIAに来た人に、ちょっとした助言をします。OIAでは、帰国生徒・一般生徒・日本籍以外の生徒、がともに過ごし、お互いに良いところを学べるような環境を基本にしていますが、次のような困りごとよく起こります。

<主に海外生活の長かった人によくある困りごと 10 >

- ・見知らぬ人に通りすがりに Smile しても無視される。
- ・前を歩いている人が、次の人が通るまでドアを支えていてくれない。
- ・いつもグループで一緒に居なければならぬようなふんい気がある。
- ・直してほしいことを、直接本人に言わずに、別の人に言う。
- ・気にしていることを、わざと口にする人がいる。
- ・人にどう思われているか、とても視線が気になるようになった。
- ・日本語のまちがいを笑われるので発言しにくい。
- ・とにかくあわただしくて、狭くて息苦しい感じがし、落ち着かない。
- ・バスや電車の順番を待つときに平気で割り込む人がいる。
- ・町にイライラしている人が多く、ささいな事ですぐとなりつけられる。

<主に日本での生活の長かった人によくある困りごと 10 >

- ・自分の能力をひけらかすような人がいて気にさわる。
- ・自己主張が強く何でも堂々と言いすぎる人がいる。
- ・仲のよい友達だと思っていたのに、平気で反対意見を言われ驚いた。
- ・常識知らずで、遠慮を知らず、あつかましい人がいる。
- ・大勢で居るときに自分勝手な行動をする人がいる。
- ・英語の指示がわからないが、恥ずかしくて質問できない。
- ・授業中、黙っているとやる気がないように思われる。
- ・まわりの人が待ってくれず、置いてきぼりにされることがある。
- ・じっとしていてもやる気があるのに、関心のない人のように扱われる。
- ・すごく困っているのに、誰も気がついてくれない。

これらは全て、これまで皆さんが慣れ過ぎてきた学校の考え方の違いによるもので、むしろOIAでは絶対に起こるものであって、実はひとりひとりにしっかり考えて学んでもらいたいことがらです。こういう時にどうすれば良いのか、自分でじっくり悩み、考えてみて下さい。どうしても自分でいいアイデアが浮かばなければ、渡部淳先生の『討論や発表を楽しもう』(全員購入)を読んでみたり、誰かにヒントを与えてもらって下さい。(本学園の教員はヘルプはしますが、代わりになって考えたりはしません。)

また、もしも人間関係などで深刻なトラブルが発生したら、ぜひ早めにカウンセラーの先生に会いに行くことをおす

すめします。カウンセラーの先生は、特に文化の違いからくる悩みごとなどにとっても詳しく、他の先生から独立して働く権限があり、内容を秘密にして相談をすることが可能です。

[この項作成 : '95 生徒部]

エピソード内容...「5つのリスペクト」のできた訳

千里国際学園創設に当たって、初年度の教員たち（半数以上はNon-Japanese教員）は1週間の合宿に参加した。

生活指導の規範について、文化の違いが心配されたが、教育学博士でもある初代インターナショナル教頭のジョンソン先生から、「～を禁止する」というのではなく、「～をしよう」というポジティブな表現が望ましい、とのことで、5つのリスペクト（自分、他人、環境、学習、リーダーシップを大切にしよう）が発案された。

同じくもう一人の初代インターナショナル教頭のカルキンス先生は、「ルール、例えば騒音の問題にしても、感じ方には個人差がある。どの程度、という論点を突き詰めると、『一切の騒音は認めない』という極論に達してしまうこともよくある。それではルールを作る意味が無いので、例えば体育館、図書館、などの場所に応じて、その場所でのルールを作るのがよい。授業においても、私の授業や教室でのルールを作り、場所や先生によってルールが異なる事を生徒に理解させるのがよい」と発言された。

日本出身の教員の中からは、「禁止の規則はゼロで」という意見も出されたが、アメリカ出身の教員から、「それは極端に過ぎる」という発言があった。

「3つの禁止事項」のうち、ガムとスケート・ボードは、純粋に校舎保全の目的からである。また、数名のアメリカ人の先生が、前の学校で大変に苦労した経験から、「ドラッグについては絶対に禁止にしてほしい」という要望が出され、タバコやアルコールを含めて、薬物類の禁止の項目が作られた。

エピソード内容...開校当時のハプニングなど

開校当時は、全校生徒約90名。アセンブリー（全校集会）はマイクなし、全員でジョークを笑った。遠足では全員でハンカチ落としを楽しんだ。人数が少なかったので、いたずらや事件があると、誰が関わったかすぐに解った。

この頃の「自由」をめぐる逸話としては、セミナー室で捨て犬を買い始めた生徒、アイスクリームのまとめ食いをして保健室で手当を受けた生徒、わざと先輩を呼び捨てにして口論を招いたケース、修学旅行中ずっと寄り添っていたカップル、授業を抜け出してバッティング・センターに行っていた野球部生徒、社会科見学の途中で捨て猫を拾って保護者と電話で交渉をしていた優しき生徒、...などがある。いくつかの不祥事もあり、その度に本校の「自由」とは何か、教員間で真剣に議論し合った事例などを挙げ、現在の視点から考えてみる。

SISで入学時に全員に署名を求めている「世界人権宣言」について、誰がいつ何の目的で作ったのか、調べてみよう。

千里国際学園の開校当時の、日本の学校や帰国生徒たちの様子について、調べてみよう。

の中で、「自由と責任」の教育方針のできた訳を、改めて考えてみよう。

千里国際学園の、「自由と責任」に関する最近の動向について、意見や情報を交換してみよう。

学園の近所の人たちや、本学園を知る校外の人々から評判を聞いたことがあれば、情報交換してみよう。

私たちの学園の、「自由と責任」の考え方が、これからもそのままよいかどうか、賛否とその理由を出し合おう。

関連して扱える単元

身近な世界の民主化とコントロール、という公民的分野の究極の目標に迫ることができる。

筆者の教室では...?

うまくディスカッションが進むと、生徒の背景により様々な背景が交錯し、互いに刺激しあう。近年は、卒業生が教育実習生として来ること増えてきたので、機会があれば在学時の様子について質疑応答をしてもらおう。

生徒たちの声によると、学園の評判は、「国際性に秀でた素晴らしい学校」「規則がなく行儀の悪い学校」と、両極端に分かれるのが毎年の特徴である。さらに深く傾聴してみると、学園の実態が伝わっておらず限られた情報の中での評判である事がしばしば見えてくるが、他校でもこんな感じなのだろうか。また、学年によると、「第一志望校と自分で決めて入学した」という生徒が3分の1未満のこともあり、入学前に「自由と責任」の校風について十分に理解され（その生徒がそのような環境に向いていると熟考・判断され）その上で志望しているのかどうか、という心配点も見えてくる。

そのような中で、開校当時の目標や雰囲気間接的にでも浸ることは重要で、高等部でさらに授業や部活動などで積極性や創造性を問われる直前の時期としてよい刺激になっているようである。

第17課 総まとめ・提言

これまでの全ての論点を踏まえて、これからの日本の教育について、提言をさせる。

生活態度について、もっと“自由”にしますか？

学習について、もっと“自由”にしますか？

また、千里国際学園の教育について、もっと“自由”にしますか？

関連して扱える単元

身近な世界の改善についての参加意識の醸成、提言スキル、インタビュー・スキル、など

筆者の教室では...?

授業時間枠の縮小から、これまでの全ての課を毎回実践できている訳ではないが、かなりの時数をかけ様々な観点から「自由」について考えてきただけあって、現状や社会情勢などをよく踏まえた上で、かつ若者らしいユニークな提案が出され、筆者も自身の「自由」観について、よく再考させられる。

グループ討論以外に、1対1のインタビュー形式で互いに意見を聞き合い、話し手ではなく聞き手に相手の意見の論旨をまとめて報告してもらおう、という活動も実施することがある。多数の討論が苦手な生徒たちが、1対1ではおもしろい見解を表現している場合がある。“聞き手は3分間休みなしに聞く”“相手が話しやすい話題から入る”など、簡単にインタビューの方法についても平行して練習していくと、内容的にも進展が見られる。現代の子供たちにとって、グループよりも1対1の枠組みの方が、より話しやすそうにも映る。

第18課 論文作成

これまでの学習の成果を、ディベートの時と同じことから（論理性、明確性、一貫性、準備、マナー）に気をつけながら、ガイドに沿って自分の意見を書き込み、準論文形式にまとめてみよう。ただし、アンケートではないので、自分の主張に筋が通っているか、全体の構成をよく頭に入れながら、何度も見直ししながら作成しよう。

「提言」が完成したら、互いに発表し合おう。

高等部では、「論文ガイド」がなくても、自力で論文を構成することにトライする予定！ そのつもりで一般的な論文の構成をよく復習しておこう。

（*「論文ガイド」の資料は、長文のため文末に掲載）

関連して扱える単元

論文スキル、など

筆者の教室では...?

「論文ガイド」は、高等部で本格的な論文作りにチャレンジする前段階のトレーニングとして、学習スキルの習熟という面からも重視

している取り組みである。表紙にあるとおり、採点基準はディベートの時とほぼ同様、弁論力そのもの（論理性、明確性、一貫性、準備、マナー、の5点を挙げ、ディベートの回にジャッジの立場の経験を経ている）を問うものであって、もちろん主張の方向については採点外であるが、生徒の持つ考え方を知るといっても大変に興味深い取り組みである。

生徒の書いた論文の内容は、数年間の間に相当の変遷があった。「論文ガイド」を始めた当初は、多少の困難があっても「自由」化を目指すべき、という傾向の主張が多かった。近年になるにつれ、特に“学級崩壊”を経験する世代になると、「自由」よりも基本的しつけを重視するべき、という内容の主張が増えてきた。最近では、「自由」尊重論、「自由」制御論、他のアспектからの整理を試みる論、がそれぞれ大体3分の1くらいずつの傾向である。

ところが、日本の教育に対する提言については様々なユニークな案や批判がある一方、自校に対する段になると「今のままでよい」という見解が9割を占めるという傾向が強まっている。その理由としては、本校は帰国生らが集まっているから、“5 リスペクト”のある特別な学校だから、ということを書いてくるケースが多く、これは“選民思想”にも繋がりがうる発想ではないか、と一席考えさせる必要が生じることもある。

身近な社会の改善について発言していく、という目標がまだ完遂できないでいるわけであり、今後の課題としたい。

<生徒の作品例 ~2005年度・冬学期の事例から~>

(学校教育の「自由」化について)始めは、校則などの緩和からはじめ、徐々に自由化に向かう、ゆっくりとした自由化を目指すべきだと思う。...これは、今まで規則にしばられ、頼ってきた者にいきなり大きすぎる自由を与えてしまったからだと思う。...なるべく多くの授業を、個人の責任を尊重するものに変えていく方針がある。...行き過ぎた自主性は協調性を害するが、適度ならば集団であっても自分の発言や行動に責任を持とうと思わせるのは可能だと思う。

(千里国際学園について)...たとえグループディスカッションであっても、必ず自分の意見を聞かれるような授業。グループディスカッションでは、何かと「なんとなく」とグループ全体で一つの曖昧な意見を提示しがちである。もし、何があっても自分の意見を言わなければいけないとなれば、生徒もどんな場面でも自分の意見を持つくせがつくと思う。

(*時々の生徒の反応を見たり、時代の変遷を考慮したり、学期授業全体の流れを踏まえたりするため、以上の全ての課を、毎学期同様に実施しているわけではないので、「論文ガイド」の内容や形式は毎回若干の相違がある。)

3. 課題と展望

この自主設定単元を扱った当初は、これほど長い年数に渡って取り組むものになるとは予測していなかったが、「自由」に関する議論は、現在まで中心的な学習テーマのひとつとして存続している。思い返してみると、次のような要因が、長寿の理由になったのではないかとと思われる。

生徒たちの年代の若者にとって、実は一般に関心が深く、悩み深い主題である。

本校が「自由」教育を掲げつつ、周囲や年度の変化という荒波に今も揉まれ続けており、古くて新しい論題である。

筆者がいまだ自分なりの結論を持っていない論題なので、“本来大人に聞かれている事柄を、あえて生徒に聞いてみる”、“身近な問題について一緒に考えて行く”という試みが、未熟さゆえの案外に新鮮な空気を保っている。

日本の教育が「自由」のあり方をめぐって、現在までの十数年間とくに若々しい議論の只中にあり、社会や家庭の関心事でもあった。

また、一部の資料や経験、特定の著者の思想だけから論じたり、そこから早急に結論を出したりすることは絶対に避けたい論題なので、できるだけ様々な視点からの資料を揃えるように心がけてきたが、“多元的に考え、集団で考え、自主的な結論を出す”という習慣を、中学3年生という多感な時期の取り組みとして、ぜひ育みたい、と願ってきた。

これまで彼らと過ごしてきた数百時間の試行錯誤の中で思うことを中間報告すると：

「自由」は、与えられた環境で自然に育つものではなく、ある選択の結果所属した先で運がよければ偶々出会うものではなく、ましてお題目を唱えていれば自ずと現れるものでもない。そして、必ずしも「強制」や「管理」の反対語でもない。

「人権」や「平和」と同じく、頭脳でも身体でも積極的に学び、後天的に習得されるべき高度な社会的抽象概念

である。

誰にでも習得の機会があり、トレーニングにより取得される資格と、その資格を得た者たちにより作られ受け継がれていく建築物としての、社会的財産のようなものではないか、...と思わされている。

もしも本校を卒業した生徒たちが、一般に自主性や個の責任感が強く、協調的であると同時に個性たくましいというよい評価が概ね本当であるなら、どのような将来の道を歩んでいるにせよ、そのような成長課題に集中的に取り組んだ一機会として本課での経験が、その一助となっていたら幸甚である。そして、その滋養は、主に、海外のある意味で“厳しい”環境にありながら、「自由」と「責任」について長期にわたって社会や学校で、身体で学んできた帰国生徒諸君から筆者が与えられてきたものが中核である(その伝達物を、この授業が世代を超えて還元できていたとすればであるが)、15年前の授業の始点での最大静止摩擦力を凌駕するために必要な原動力は、本来彼らの所持していた宝物であったことも記しておかねばならない。また、この15年間の拙い本実践の中に、もしも他校の実践にとっても少しでも参考になるものがあれば、更なる幸いである。

ところで、長らくこのテーマの学習を続けてきたが、近年の日本社会や教育界の動向の激しさは勢いすさまじく、社会科学の基本的かつ一般的な命題として「自由」の論題を中3の年代で扱うことが今後も意義のあることかどうか、(毎回自問自答してきたことではあったが)、改めて腰を据えて考え直さねばならない時期ではないかとも思わされている。

その理由は、次の通りである。

冒頭に記したように、本校の校是である「自由」主義的教育は、初期から中期にかけての海外帰国生徒教育の成果と教訓とに根拠としていたが、今その根拠を直接的にどこに求めることができるのか、が問われている。

が当然、帰国生徒の受け入れを主たる役割の一つとする本校の存立基盤にも影響を与えており、国内各校の校則の見直しや自由・人権の観点の取入れが進んだ結果ともあいまって、「自由」主義が本校の確固たるスクール・アイデンティティの一翼としては必ずしも成立しにくくなっており、その比重が相対的に低下している。

生徒や保護者の指向性が変わり、公教育の困難さにあって、「きめ細かい指導」を私学教育に求める傾向が強まり、特に放任に近い「自由」主義教育は、あまり魅力ある論点ではなくなりつつある様子である。

SISでは、「自由」とは何か、というホットな論争の幅が次第に狭まり、様々な制度や施設の整備、生徒の便宜の向上などの学校アメニティ(過ごし良さ)の伸張という論点に次第に観点が移り変わってきたことにより、「自由」という論点そのものの放つ印象が、やや老朽化してきた感もある。

このような背景にあってもなお、だからこそ「自由」の重みは却って増しつつある一方である、とも強弁することも可能ではあるかと思うが、いま、この時代に、この学校で、なぜ「自由」なのか、という新たな根拠付けを真摯に模索せねばならない必要性が、いま生じている。古くて新しい、社会科学の根源的な命題の一つである「自由」を、今後はどのように授業や学級の中でわかりやすく、また生活実態に沿ったものとして展開していけるか、大きな課題として再認識させられているところである。

(完)

*注及び参考文献

<図書、資料など (五十音順)>

岡本太郎氏の講演会メモより 1985年 於：国際基督教大学

(財)岡本太郎記念現代芸術振興財団 岡本太郎記念館の展示資料より(2005年訪問)

金森美知子「子犬の育てかた」『暮らしの手帖』71号 1997-98年 12月&1月号

神山吉光『J学園が崩壊する日』閣文社 1991年

河上亮一『学校崩壊』草思社 1999年

小泉栄司『日米比較 中学・高校生の生徒指導～日本とアメリカの事例と対応』小学館 1989年

椎名誠『「自由」の代償』『続・岳物語』集英社文庫 1989年

椎名誠氏の講演会メモより 2003年 於：千里阪急ホテル

吹田市広報課「太陽の塔 内部に潜入取材」『市報すいた』 No.980 2004.2.15

総務省 行政管理局 行政情報システム企画課 情報システム管理室 共通システム担当 法令データ提供システム「軽犯罪法」 <http://law.e-gov.go.jp/htmlldata/S23/S23HO039.html>

中村征夫「グレートバリアリーフでの冷や汗」『海も天才である』 角川文庫 1992年

日本青少年研究所「高校生の学習意識と日常生活～日本・アメリカ・中国の3ヶ国比較」 2005年

日本青少年研究所「日本・アメリカ・中国の高校生の規範意識の比較」(1996年、以降の年々の統計資料含)

細井敏彦『校門の時計だけが知っている～私の「校門圧死事件」』草思社 1993年

「担任やめたーい 3人に1人」朝日新聞 1999.4.7号 記事

『生徒と保護者のためのハンドブック』千里国際学園 大阪国際文化中学・高等学校(OIA) 1995年

<映像資料など (五十音順)>

「学級崩壊」NHK

「K大学の卒業式」MBS系(地方ニュース)

「コンビニ高校事件」TV朝日系(全国ニュース)

「シリーズ・J学園」TBS系(全国ニュース)

「スクール・ポリス」TBS系

「T学園の試練」日本TV系

「T高校事件」TV朝日系(全国ニュース)

他

(なお、書名に校名が含まれる場合、正確を期すべき実践研究の発表稿ではあるが、本紀要の出版の位置づけ上、仮名とした。)

以上
(以下、付属資料)

日本とS I Sの教育のあり方に関する提言、特に「自由」について

～論文作成ガイド～

9年__組__番 NAME_____

*****<POINT:論点を尽くす>*****

論点を尽くして論じる事が、論文ではとても必要です。

学期の学習の総まとめも兼ねて、授業で取り上げた次のそれぞれの論点について、
しっかり論じ、自分の結論を示そう。自分の力で人を説得する力を身につけよう！

ディベートの時と同様に、論理性、明確性、一貫性、準備、マナー

(今回も採点基準とします)などに気をつけて論じよう。

文中、_____には適切な言葉を書き入れ、_____には主張や見解を書き入れていこう。

～____月__日(____)の「基礎社会3」の授業の開始すぐに、提出。～

<アウトライン>

・第一感と結論の提示

・検討

- A . 日本の教育の問題点
- B . 「自由」に賛成の意見
- C . 「自由」に反対の意見
- D . 私の学校生活

・結論

・第一感と結論の提示

(1) 第一感...日本の学校教育を「自由」にするか、もっと厳しくするかについて、最初に私は、基本的には、_____と
_____と思っていた。その理由は、次のとおりである。

(2) 結論の提示...この後に示すように、色々検討を重ねていくにつれて、私は日本の学校教育を、簡単に言うと、
次のようにするべきだと思うようになった。なぜかについては、この後詳しく示していく。

・検討

A . 日本の教育の問題点

- (1)資料...日本の教育に関する様々な統計資料を見ると、従来から次のようなことが指摘されていた。
教育に世界トップクラスの国家予算をつぎ込んでいながら、若者の校内暴力、覚醒剤使用などの問題件数は急増中で、国内刑法犯の約半分が未成年者の犯行である。
外国語の授業時数は諸国に比べて特に少ないわけではないが、TOEFL の成績はアジア諸国中で、(最低・最高)の水準である。
大卒者の割合は4割を超え、高卒と大卒の賃金格差が先進国中最も(大きい・小さい)国である。
日本の青年で、(学歴でなく)大学の成績が評価されると思うのは、_____ %くらいである。

- (2)歴史...日本の教育に関する歴史を振り返って見ると、次のようなことが見えてくる。
戦後、アメリカの占領軍により、個人の個性を生かした教育や、学校や地域の特性を生かした教育制度が導入されたが、当時の日本の風土にはあまりになじまず、しばらくすると改正された。
日本が経済発展を国の第一の目標に挙げると、国を発展させるための優秀な人材を育てるため、たくさんの知識を詰め込む教育が行われた。しかし、「_____競争」についていけない生徒たちは非行に走り、校内暴力が各地で発生した。学校は様々な_____を作って、生徒の非行を防ごうとしたが、細かすぎるルールに対して反発も起こった。そんな時に、自由な教育を掲げる学校が登場すると、人々の大きな期待が集まった。
やがて石油ショックが起こり、バブル経済が崩壊して高度成長時代が終わりを告げると、“いい学校 いい大学 いい会社 しあわせな人生”というパターンは成り立たなくなった。学校では、いじめ、不登校、学級崩壊(生徒や児童が教師の指示に従わず騒いだり出歩いたり勝手な行動を取り、授業が成り立たなくなること)などの問題が多発し始めた。土曜休校などの「ゆとりの教育」が叫ばれ、学習内容が減らされ、生徒の興味や経験を重視する「_____的な学習」が始められた。

(3)現状

ゆとりの教育や総合学習の流れに対して、「学力低下」の問題が指摘され、新しい教育制度には早くも見直しが始められている。漢字や計算の基礎力を重視する授業が見直される一方、ようやく根付き始めたばかりの総合学習をなぜやめるのか、という意見もあり、日本の教育方針は大きく揺れている。
殺人や覚醒剤の使用など、少年犯罪の低年齢化や凶悪化が起こり、これらは教育にも原因があるのではないかとされている。また、国内刑法犯の約半分が未成年者の犯行である。
「_____ (生徒や児童が教師の指示に従わず騒いだり出歩いたり勝手な行動を取り、授業が成り立たなくなること)」は全国の小学校1校あたり平均1クラスくらいの割合で起こっている。不登校の児童・生徒は増え続け、全国で約14万人に達している。小・中学生の約13%がうつ病にかかっているか、その予備軍にある状態、との調査もある。
あるアンケート調査によると、学校の先生のうち約1/3が「教師を辞めたい」と悩んだことがあるらしい。問題への対応に疲れてノイローゼや過労死におちいる教師の事例も報道されている。
大学教育についても問題が起こっている。ある研究機関の、世界の大学教育の調査によると、日本の最高学府といわれる東京大学のランキングは世界で第41位。これでは世界に通用する教育とは言えないとの指摘もある。全国で、成人していながら社会に出ない「引きこもり」や親元を巣立たない「パラサイト」の若者が数十万人居ると言われている。小中高だけでなく、大学教育の改革もすぐに必要と言われている。

私は、これらの資料を見て、次のように思った。

(4)論文...心理学者の多湖輝教授は、著書『頭の体操』の中で、
「膨大な知識の貯水池のようになりながら、少しも頭脳そのものの働きが活発にならない、頭の回転の鈍い_____型の人間が世にはびこっている」という警告を既に数十年前に発していた。

私は、多湖氏の主張に対しては(賛成、反対)である。その理由は、こうだ。

(5)事例...厳しい校則をやめて「自由」な教育を目指したが、必ずしもうまくばかりは行かなかった学校の例がある。

T高校は、大自然の中、木造の校舎で、これまで規則の厳しい学校では力を発揮できなかった生徒と、そういう生徒たちに理解のある教師陣を集めて設立された。日本中から自由な学校の教育方針に共感し期待を寄せる人々の幅広い寄付が集められ、日本初の「_____立」の高校となった。その教育方針は、生徒の自主性を尊重し、命令や_____をしない、というものであった。しかし1ヶ月足らずで喫煙、暴力、いじめ、授業のさぼり、器物破損などの問題が続発し、やむなく一時休校の処置を取ることとなった。

J学園は、強制や命令をしない、という理想に燃えた教員達のもとで設立された。芸術関係などで優れた卒業生を輩出する一方、飲酒、喫煙、男女の目に余る行動などの問題が発生し、近隣の住民達のアンケートでは_____%の人々が撤退してほしい、と答えた。

私は、これら命令や強制をしない学校の教育方針については、(賛成、反対)である。その理由は、こうだ。

また、_____ (聞き手と話し手に別れて対談形式で意見を聞きあう方法)を行ったところ、相手の_____さんは、これら命令や強制をしない学校の教育方針について、(賛成・反対)で、その理由は、こうだった。

(6)国際会議...また、日本の有志の生徒たちが、国連の子供の権利に関する委員会に飛び入りし、細かな校則や激しい受験競争について訴えたことがあったが、委員会のメンバーは「貧しくて学校の無い国や、働かされて学校へ行けない子供をいっただうすればいいのか、を話し合っている場所なのに、世界の状況に比べて、日本の子供たちの悩みはぜいたくすぎる」という反応であったようである。

(7)調査統計資料...日本・中国・アメリカの3ヶ国で行われた調査によると、親に反抗することや、教師に反抗することなどについて、「本人の自由でよい」と答えた生徒の割合が、極端に高い(_____%)位。

これらの学校の事例などから整理すると、日本の社会や学校で今問題になっている「自由」の考え方には、次のような特徴や問題点があるのではないと思われる。(箇条書き 3 ポイント程度にまとめる)

1:
2:
3:

B. 「自由」に賛成の意見

(1) 真に優れた独創性や想像力に基づいた芸術や学問を育むためには、少々不道徳な行いがあってもいちいち相手にせず、放置して自分で責任を取らせるという方針の教育がある。以下のように、とても範囲の大きな「自由」を尊重する学校の気風を、何かと息苦しい社会といわれる日本では、むしろ大いに取り入れるべきだという声もある。

J 学園の卒業式では多くの生徒が思い思いの服装で参加し、1本のマイクを用いて誰もが自由に発言し、校長の伴奏で歌を歌い、多くの卒業生が感動の言葉を述べている。校長は「さん」づけで呼ばれ、参加者の一人に過ぎない。

「学生が_____するくらい(千里国際学園副理事長・F氏による)」の自由を学風とするK大学では、卒業式に学生達が奇抜な仮装で参加する伝統があり、学生達は独創性や想像力を試され、学長や教授達はそういう学生の行動をゆるす度量が試される。政府の官僚を多く養成するT大の出身者に比べて、ノーベル賞の受賞者がK大に多いのも、このような学風のためだと言われる。

実は、F氏らが創設したO.I.A.時代の千里国際学園も、最初はこのような「自由」な教育を目指していたのである。開校まもなく全校生徒が少ない時代には、ロッカーに鍵は無く、遠足ではハンカチ落としを楽しみ、アセンブリーでは冗談を全員で笑った。アイスクリームを食べ過ぎたり、上級生を見下して呼びつけたりする勘違いもあったが、生徒の一人一人がとても個性的で、学校を自分達で作り上げていくという気運が強く、若い学校で自分の進路を切り開いていこうとするたくましさがあった。

(2) 歴史をひも解くと、人間が自由や権利を獲得していく過程は、常にその時代の枠組みとの戦いであったことがわかる。例えば、_____は、「人民は政府に抵抗し、政府をくつがえす権利がある」と主張し、_____は、「人間の自由と平等を実現するためには、人民が主権者になる以外に方法はない」と主張した。名誉革命やフランス革命などの市民革命では、これらの_____思想家たちの考え方が、人々の命がけの闘いの支えとなり、王や一部の人が権力を握る絶対王政の時代を終わらせ、民主主義の時代を切り開いてきたのである。真の「自由」を勝ち取るためには、人間を縛る枠組そのものを壊す事も、時には必要とされてきたのである。(*HINT: 教科書や『ビジュアル公民』、用語集を見てみよう!)

(3) かつての日本政府は、「_____法」(1925年制定)という法律を作って、政府に反対する人間や、政府にとって都合の悪い考え方を持つ人間を次々と抹殺し、人々の思想の自由を奪った。人々の基本的な権利を奪う悪法であることはもちろんだが、国のとった行いに対して国民が責任を持たないようになり、日本社会の最大の悪習の一つである_____をもたらず原因の一つを、この法律は作り出してしまった。また、「じっとしていても誰かが社会の面倒を見てくれる」という考え方は、安全管理や危機管理の甘さにもつながり、現在でも阪神大震災などの災害や、公害、薬害などの事件の際に「人災」を招く原因になっているとも言われている。こういう歴史や社会問題のある日本では、特に人々の自由や権利を、政府や国民たちが大切にしなければならない、という反省がある。

(4) 世界的冒険家でカヌーイストの野田知祐さんと、冒険作家の椎名誠さんは、

「犬は自然の中で放し飼いにするのが良い。今の日本の世の中は息苦しくなっていて、世界の辺境に行くと犬と_____とは自由である。生き物は危険のある中で鍛えられてこそ本当に強くなる。囲いの中で鎖につながれたまま長生きして死ぬよりも、たとえ事故死しても本人たちは満足だろう。」という考えに、互いに共感しあっているようである。人間の子どもの育て方にも、この考え方はあてはめられるのではないだろうか。

私は、以上のような「自由」な教育や、「自由」の考え方を日本でもっと広めることについては、(賛成、反対)である。その理由はこうだ。

C. 「自由」に反対の意見

(1)現職の中学教師である河上亮一氏は、要約すると、次のような事を著書『学校崩壊』に書いている。

「今の生徒たちの_____は昔と違って固くて狭く、傷つきやすく、自分を抑える事を知らない。自分の好きな事は何をやっても良く、いやな事はやらなくていいんだという雰囲気が社会に広がり、学校が_____の場であるということが忘れられた。教師たちは学校の荒れを何とかしようと、苦肉の策として細かな_____を作ったが、マスコミや社会がそれを使った学校のやり方を攻撃し、歯止めがなくなった。そうして生徒たちは自由や人権を盾にますます勝手なことをするようになり、学校が教育の場でなくなっていった。自分で考え自分で行動し、行動した結果に対してを持たせるやり方は理想だが、経験の上では大多数の生徒にはそれは無理であり、全て個人の責任にする方向の教育改革には反対だ。」

私は、河上氏の主張に対しては(賛成、反対)である。その理由は、こうだ。

(2) O.I.A.の頃の『生徒・保護者向けハンドブック』にもあるが、哲学者のサルトルは、人間はみな自由でありすべてのことは自分で決めているとも考えられるが、人間の独創性や想像力には限界があるので、人は不安になり悩み苦しむ、ということをして、「人間は_____」という名言で表現している。自由な環境になればなるほど、人の器量の大きさが試されていく。真の自由を楽しむには、特別な資格が必要になってくるようである。

(3)犬の訓練に携わる金森さんは、犬まかせの育て方には反対である。

「犬を育てるには、犬がまだ幼い頃から日頃の接し方を通じてきちんと_____をしておくことが重要。おすわり、噛まない、かじらない、歩く順序、食事、睡眠、放せ、など家の中のルールを決め、人間と犬との_____の上下をわきまえさせて、ふだんから犬に守らせるよう訓練するのが大切である。訓練をしていくと犬は顔つきがおだやかになる。主人が誰で主人の望んでいる事を知っている犬は、安心していて幸せである。」と、述べている。

人間の子どもの育て方にも仮に当てはめて考えてみると、私は、金森さんの育て方の方針に対しては、(賛成、反対)である。その理由は、こうだ。

(4)大きな「自由」の考え方のもとでは、手慣れた人々は余計な縛りが無いので実力を発揮しやすいが、素人や初心者にとっては、大変恐ろしい結果を招く事がある。ベテラン・ダイバーで水中写真のパイオニアである中村征夫さんは、グレート・バリア・リーフであわやの思いをした。初心者のダイバーが勝手に深海に潜り、危険に気付かずどんどん深みへ落ちて行ったのである。重過ぎるおもりをつけていた上に、_____にかかり、自分の行動すら解らなくなっているというとても危険な状態だったが、奇跡的に助けられた後も本人は何の反省も感じていなかった。中村さんが、同行していたオーストラリアのインストラクター達に、なぜ救助できなかったか、と激しく非難すると、「予定を守らず勝手に潜った本人に責任がある。命を賭けては助けなかったからといって、インストラクターを責めるのはおかしい」などと反論され、議論は“_____”についての考え方の違いから、“水かけ論”になってしまった。

私は、どんな場合でも自分の命は自分の責任で守るべき、という徹底した「自己責任」の考え方に対しては、(賛成・反対)である。その理由はこうだ。

私は、これらのように、「自由」はあまりよくないという考え方や、「自由」を日本の教育にあまり取り入れてはならない、という考え方については、(賛成、反対)である。その理由はこうだ。

D. 私の学校生活

(1)千里国際学園の教育方針は、生徒向けのハンドブックによると、生徒に自由と_____との両方を持たせるやり方であり、そのための手がかりとして次の3つを基本に置いている。

「小さな国際社会」で守る一番基本的な常識としての、_____への宣誓署名
5つのリスペクト(内容: _____の5つを尊重する)
3つの禁止事項(内容: _____の3つをしない)

私は、上のような千里国際学園の教育方針に対しては、最初は(賛成、反対)だった。その理由はこうだ。

(2)心理テスト「自由池で泳ごう」を使ってクラスで意見交換してみたところ、自由と責任との関係は、だいたい次のようであることがわかってきた。

(3)近年、千里国際学園では、次のような変化が起こった。

2001年、校舎の使い方やゴミの捨て方についての大きな問題が起こり、生徒ボランティア・クラブの調査によると、約8割の人がゴミのポイ捨てや禁止されている場所での飲食などの経験があると答えた。このように「一部の決まった人ではなく、多くの人が少しずつ悪いことをしている」状態が指摘されたのは、学園が創られて以来、初めてのことであった。

二人の校長が「放課後の校舎の使い方の状態が良くならなければ、全校生徒を16:30下校にする」と放送で呼びかけ、一定の観察期間を設けた。生徒会やボランティア・クラブ等の活躍で下校時刻の繰上げはなされなかったが、その後も放課後の教室の使い方や、男女の目に余る行動、ゴミのばい捨て、教室での飲食、コンピューターの破損、校外での行いやマナー、などが次々と問題に上がり、校長は各クラスでの話し合いを求めた。

その後、池田附属小学校の悲惨な事件をきっかけに、生徒を「_____」から守るために、クラブ活動など監督の教員が居ない生徒は16:30に下校するように決められた。さらに、校門や通用門などには外側から入れないような装置が付けられ、朝8:30を過ぎると玄関は閉じられることになった。

現金や水着の盗難など、個別には対処しきれないような問題が発生するようになり、ついに開校以来の習慣をやめて、生徒のロッカーに_____をつけられるようにする工事が実施された。

カフェテリアのゴミや食器の片付けなどの状態がひどくなり、おばさん達がいかに困っているかというインタビューが全校に放送された。この問題については生徒議会での話し合いが行われていたが、その後、学園祭を振り返るビデオでも、掃除のおばさんがゴミの分別の悪さに困っている様子が映し出された。

(4)教育の現状を良く知る人々からは、千里国際学園の生活指導の方法は、そもそも開校当初から“いばらの道”と疑問視されてもいたようである。「自由」を目指して残念ながらすべてはうまくいかなかった学校の例もあるし、日本の若者たちの生活態度が全国的に悪化していく中で、校則を最低限度にして未成年の生徒に「自由」と「責任」を与えるなど、無理か又はとんでもないことだ、という考え方がその背景にあったようだ。

・結論

以上の検討をふまえて、私は結論として、次のような提言をしたいと思う。

A．日本の学校教育の自由化については、次のようにしていくべきだと思う。(根拠もはっきり！)

B．また、日本の教育に関する上の提言を踏まえて、千里国際学園（特にSIS）の「自由」教育の方針については、今後は次のようにするべきだと思う。(根拠もしっかり書こう。Bの結論がAの結論と違う場合、なぜ違うのか、特に理由をしっかりと書こう。)

<参考文献一覧表>

例：中村征夫『海も天才である』角川文庫

* 参考にした本の著者・書名などを一覧にして記しておくのが論文作成のルール。例にならって、授業で使ったり、文中に出てきたりした本や資料について（もしあれば、新たに自分で参考にしたものも含む）、上の欄に全てきちんと記しておこう。

以上